

令和7年度展覧会

展覧会の方針

日本における写真・映像文化のセンター的役割を果たすと共に、国際的な交流の拠点となるべく、コレクションの活用と自主企画・誘致展を組み合わせながら、「質の高い写真・映像文化と出会う美術館」にふさわしい展覧会を開催する。

○感動や気づきを与える

観覧者に感動や気づきを与えたとともに、専門家から一般の鑑賞者まで、満足度の高い展覧会を実施する。

○ミュージアム・コンプレックスの実現

写真美術館の3つの展示室あるいはホールを有効に組み合わせ、いつ誰がきても楽しめる展覧会のラインナップを提供する。

○全てが企画展

固定的な常設展示と異なり、収蔵品を有機的に結びつけるテーマを設定するTOPコレクション展や、独自の切り口による調査、研究に基づいた自主企画展等を開催する。

令和7年度は、前年度から継続して2025年末まで総合開館30周年記念展を開催した。年明けからはこれからの30年を次世代へ引き継ぐことを意識しながら多様な企画を実施した。アクセシビリティ向上にも努め、特に関連事業では多様な来館者が参加しやすく、楽しむことができる場の創出を心がけると共に、コンセプトやテーマが伝わりやすい広報を展開したことから、訪日外国人や多層な来館者増という結果につながった。

◇収蔵展

世界でも有数の3万8千点を超える写真・映像コレクションを活用し、調査研究に基づいた館独自の視点で展覧会を企画・実施した。

(1) 総合開館30周年 TOPコレクション展

○複数の学芸員による共同企画・オムニバス形式のコレクション展「不易流行」「トランスフィジカル」展を開催した。各々の専門領域を活かしながら収蔵作品を継承する試みでもあり、多角的な視点で写真と映像表現の魅力をご紹介した。

○「作家の現在」展では、国内外で活躍が目覚ましい収蔵作家の現在の活動を、収蔵作品と制作中の作品や新作と合わせて紹介した。進行形の作家活動に触れる機会を通し、作品理解を深めるとともに、作家自身が表現の可能性を探る場を創出した。

(2) 重点収集作家・収蔵作家個展

○第三期重点収集作家のひとり、鷹野隆大の個展「カスババーこの日常を生きるのびるために」を総合開館30周年記念事業として昨年度より引き続き開催。

○収蔵最多数のユージン・スミス作品の中から、ニューヨークのロフト時代に焦点をあて、1950年代後半-70年代ジャーナリズムと芸術表現の融合を試みるスミスの活動を紹介。

◇自主企画展

支援会費を中心とした自主財源を効果的に用い、多様な切り口で、

話題性のある展覧会を国際動向もふまえて実施した。

(1) 総合開館30周年記念 国際作家個展

総合開館30周年を期に調査、研究、準備を長期計画した大規模の国際作家個展を実現した。

○「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展では、20世紀から映像、写真表現者へ多大な影響を与え続けているイタリアを代表する作家の世界観と魅力を財団、研究者と追究し、写真表現の神髄を未来へ継承する場を創出した。

○国際的に高い評価で注目を集めるポルトガルの映画監督ペドロ・コスタの大規模個展「インナーヴィジョンズ」を開催。会場全体が映像体験となる壮大な空間インスタレーションを制作し、社会と個人の間をつなぐ映像表現の在り方に迫った。

(2) 総合開館30周年記念 新進作家展

将来の写真・映像文化を担う新進作家の発掘につとめ、毎年テーマを設定して展覧会を開催し、写真・映像文化の裾野を広げるシリーズ第22回目。「遠い窓へ」と題し、遠い窓へ思いをはせるような距離感で、誰かや何かに寄り添う手がかりを探る5名の作家(寺田健人、スクリプカリウ落合安奈、甫木元空、岡ともみ、呉夏枝)を紹介した。

(3) 恵比寿映像祭2026

第18回となる今回の総合テーマは日台英の三か国語で「あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」とし、長い歴史の変遷によりさまざまな文化が積層した台湾の言葉を導線に、多様な文化、言語、歴史等が互いに影響し合う複層的、多声的な社会と人の在り方を考察した。全館、恵比寿ガーデンプレイス、動く歩道、近隣施設などを会場に地域と連携しながら、展示、上映、教育普及・社会共生プログラム、トークやシンポジウム等、多彩なプログラムを実施した。また、昨年の恵比寿映像祭2025特別賞受賞アーティスト 小森はるかの特別展示と総合テーマに沿った東京都コレクション展を開催。さらに、会期中には恵比寿映像祭2027に向けて制作委嘱する4名のアーティストをコミッションプロジェクト・ファイナリストとして選出、発表した。

◇誘致展

写真団体の継続した活動紹介、長期にわたって蓄積・分析した史料に基づく被爆80年企画、旬のアーティストの国際アワード、昆虫の生息を最新技術から探り現代を再考する企画等、企業、新聞社、団体等、主催者の強みを生かし、展覧会にヴァリエーションをもたらした。

収蔵展

総合開館30周年記念

鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―

TOP 30th Anniversary

Takano Ryudai: kasubaba Living through the ordinary

期間：令和7年2月27日（木）～6月8日（日）60日間（令和7年4月1日以降の開館日数）

会場：2階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
特別協力：ソニー株式会社
後援：J-WAVE 81.3FM

国内外で活躍を続ける写真家、鷹野隆大（1963-）の個展。写真集『IN MY ROOM』（2005）で第31回木村伊兵衛写真賞を受賞した鷹野は、性差やセクシュアリティをテーマとした作品と並行し、〈毎日写真〉や〈カスババ〉といった日常のスナップショットを手がけ、さらに東日本大震災以降、「影」を被写体とした写真の根源に迫るテーマにも取り組んできた。本展のタイトルである「カスババ」とは鷹野による造語で、カスのような場所（バ）の複数形を指す。本展では、最初期の作品から最新作まで、30年以上に渡るキャリアから代表作を網羅しつつ、現在進行形で続く鷹野の制作活動を紹介する。誰もが隣り合わせにある日常に焦点を当て、鷹野が日常に向けるまなざしを鑑賞者が追体験することで、日常への新たな視点や生きることの豊かさを提示した。出品された主なシリーズとして、〈カスババ2〉〈毎日写真〉〈In My Room〉〈おれと〉〈立ち上がりキクオ〉〈Red Room Project〉等の代表作の他、最新作〈CVD19〉や初公開となるインスタレーションも展示。展示デザインを西澤徹夫建築事務所が担当、広報印刷物・図録デザインを北川一成（GRAPH株式会社）がおこなった。

出品作家：鷹野隆大

出品点数：109点

入場者数：16,706人（令和7年4月1日以降）

企画：鈴木佳子、遠藤みゆき

展覧会図録

『鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―』

執筆者：鷹野隆大、沢山遼、伊藤亜紗、高嶋慈、遠藤みゆき

編集：東京都写真美術館

発行：水声社



総合開館30周年記念

TOPコレクション 不易流行

TOP 30th Anniversary

TOP Collection: Continuity and Change

期間：令和7年4月5日（土）～6月22日（日）68日間

会場：3階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

東京都写真美術館の総合開館30周年を記念するTOPコレクション展。学芸員5名の共同企画による展覧会で、多角的な視点から当館コレクションを選び、写真と映像の魅力を紹介した。本展のタイトル「不易流行」は、江戸初期の俳人・松尾芭蕉（1644-1694）が俳句の心構えについて述べた言葉に由来する。「不易を知らざれば基立ち難く、流行知らざれば風新たならず〔現代語訳：変わらないものを知らなくては基本が成立せず、流行を知らなくては新しい風は起こらない〕」という言葉がもつ精神を大切に、本展は過去の芸術表現を深く理解し、その魅力を今に伝えていくとともに、現在の表現や時代の潮流にもしっかりと目を向けることを目標とした。19世紀から20世紀、現代までを取り上げる5つのテーマで構成されるコレクション展となった。

出品作家：ジャック・アンリ・ラルティエグ、アウグスト・ザンダー、下岡蓮杖、フェリーチェ・ベアト、オノドラユキ、山元彩香、石内都、塩崎由美子、片山真理、大塚千野、アルフレッド・ステイーグリッツ、ドロシア・ラング、林忠彦、江成常夫、菱田雄介、植田正治、杉本博司、山上新平、赤瀬川原平、田村彰英、長野重一、潮田登久子、鬼海弘雄、瀬戸正人、大西みつぐ、荒木経惟、山崎博、中野正貴、佐内正史、澤田知子、長島有里枝、野口里佳、杉浦邦恵、古橋梯二 ほか

出品点数：写真・映像作品224点、資料5点

入場者数：22,844人

企画：佐藤真実子、大崎千野、室井萌々、山崎香穂、石田哲朗

展覧会図録

『TOPコレクション 不易流行』

執筆・編集：佐藤真実子、大崎千野、室井萌々、山崎香穂、石田哲朗

編集・発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル
TOP 30th Anniversary TOP Collection: transphysical

期間：令和7年7月3日（木）～9月21日（日）70日間
会場：3階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

「TOPコレクション 不易流行」展から引き続き、4名の当館学芸員の共同企画によるオムニバス形式での展示を行った。「トランスフィジカル」というテーマをもとに、モノとして存在する写真の「物質性」や、被写体や作家自身の「身体的表現」に着目した。これまでのコレクション作品のあらたな読み解き方を紹介し、イメージがつくられていくその豊かな過程へ目を向けた。初期写真から出発して写真と絵画の関係性を探る「第1室 撮ること、描くこと」、「踊り」という身体表現による衝動と社会性に迫る「第2室 dance」、色で広がる視覚表現を体感する「第3室 COLORS」、コンセプトチュアル・アートに影響を受けたステージド・フォトグラフィと実験的なビデオアートを取り上げる「第4室 虚構と現実」、デジタル時代において写真の物質性とオリジナルプリントの価値を問い直す「第5室 ヴィンテージと出会うとき」と多彩な5つのテーマで構成。黎明期から現代まで写真・映像史を網羅するような、東京都写真美術館の体系的なコレクションの中から、時代を超えて語り継がれる優れた写真・映像作品を紹介する重要な機会となった。

出品作家：アンセル・アダムス、ウジェーヌ・アジェ、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ルイ・デュコ・デュ・オーロン、ウィリアム・エグルストン、ロバート・メイブルソープ、アーウィン・オラフ、ゲルハルト・リヒター、シンディ・シャーマン、チェン・ウェイ、石原友明、出光真子、今井壽恵、岩根愛、瑛九、エキソニモ、オノデラユキ、川内倫子、小本章、小山穂太郎、鈴木のぞみ、田口和奈、多和田有希、東松照明、内藤正敏、野村佐紀子、浜田涼、細倉真弓、森村泰昌、安村崇、山沢栄子、山城知佳子、山本糾 ほか

出品点数：183点
入場者数：31,428人
企画：遠藤みゆき、山崎香穂、邱于瑄、石田哲朗

展覧会図録

『TOPコレクション トランスフィジカル』
執筆：遠藤みゆき、山崎香穂、邱于瑄、石田哲朗
編集・発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ
TOP 30th Anniversary Pedro Costa Innervations

期間：令和7年8月28日（木）～12月7日（日）88日間
会場：地下1階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：在日ポルトガル大使館／カモンイス国際言語協力機構、J-WAVE 81.3FM

企画協力：濱治佳（シネマトリックス）
グラフィック・デザイン：吉岡秀典+及川まどか（セプテンバーカウボーイ）
会場デザイン：西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所）

ポルトガルを代表する映画監督 ペドロ・コスタ による、日本最大規模かつ東京では初となる個展。本展は、スティーヴィー・ワンダーのアルバム『インナーヴィジョンズ』（1973）に着想を得て、コスタの映像表現とその背景にある歴史的・社会的文脈を考察することを目的として開催された。展示では、映画『ヴァンダの部屋』（2000）や『ホース・マネー』（2014）などを中心に、登場人物や生活の場に焦点を当てた映像作品と、ジェイコブ・リースによる東京都写真美術館のコレクション作品をあわせて紹介した。また、作家自身が選定した作品によるカルト・ブランシュ上映および代表作の特別上映を実施し、映画と展覧会の双方からペドロ・コスタの映像世界を提示した。

出品作家：ペドロ・コスタ、ジェイコブ・リース
出品点数：27点
入場者数：21,575人
（展示入場者数とは別に、カルト・ブランシュ上映 1,548人、特集上映 1,212人）
企画：田坂博子

展覧会図録

『ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ』
執筆：ペドロ・コスタ、ニコル・ブルネーズ（映画研究者、映画プログラマー）、小田香（映画監督）、ガスパール・ネクトゥー（映画批評家）、田坂博子
編集：ソリレス書店、シネマトリックス、東京都写真美術館
発行：ソリレス書店



総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから
TOP 30th Anniversary—State of the Artist: So Far and
From Now On

期間：令和7年10月15日（水）～令和8年1月25日（日）86日間
 会場：2階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
 協力：株式会社カラーサイエンスラボ／株式会社写真弘社／有限会社フ
 ォトグラファーズ・ラボラトリー／PGI

東京都写真美術館は、2025年に総合開館30周年を迎えた。1995年の総合開館以降、社会の変化と呼応しながら多様な写真表現が生み出され、その歴史は継続的に更新されてきた。本展では、国内外で活躍する作家の現在の活動を、当館所蔵作品等とあわせて紹介した。進行形の作家活動を提示することで、作品理解を深めるとともに、今後の表現の可能性について考察する機会とした。

出品作家：石内都、志賀理江子、金村修、藤岡亜弥、川田喜久治
 出品点数：106点
 入場者数：24,381人
 企画：丹羽晴美、伊藤貴弘



W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代
W. Eugene Smith and New York: The Loft Era

期間：令和8年3月17日（火）～6月7日（日）13日間（令和8年3月31日まで
 の開館日数）
 会場：2階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
 後援：J-WAVE 81.3FM

本展は、当館が所蔵するW. ユージン・スミス作品を中心に、同作家の1950年代から70年代にかけての活動に焦点を当てた個展である。スミスは1954年に『ライフ』誌を退職後、マンハッタンに通称「ロフト」と呼ばれるアパートに移り住み、制作を行った。本展では、このロフト期の作品を核とし、日本では紹介の機会が限られていたシリーズを中心に紹介するとともに、その前後の時代の作品もあわせて展示することで、スミスの制作活動を体系的に示した。また、アリゾナ大学附属のCenter for Creative Photographyに収蔵されているW. ユージン・スミスのアーカイヴ資料をデジタル借用し、当時のロフトの様子を再現・紹介した。これにより、従来のスミス像とは異なる側面に着目し、ジャーナリズムと芸術の双方にまたがる制作の試みを示した。監修は〈水俣〉共著者であるアイリーン・美緒子・スミスが担当。あわせて、本展ではスミスと音楽との関係性にも着目し、その調査研究にあたっては『THE JAZZ LOFT PROJECT』の著者であるサム・スティーブンソンの協力を得た。

出品作家：W. ユージン・スミス、アイリーン M. スミス、桑原史成、ロバート・フランク、ダイアン・アーバス、アンリ・カルティエ・ブレッソン
 出品点数：233点
 入場者数：5,307人（令和8年3月31日まで）
 企画：室井萌々

展覧会図録

『W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代』
 執筆者：サム・スティーブンソン、室井萌々
 編集・発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念

ルイジ・ギッリ 終わらない風景

TOP 30th Anniversary

Luigi Ghirri Infinite Landscapes

期間：令和7年7月3日（木）～9月28日（日）76日間
会場：2階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：在日イタリア大使館
助成：公益財団法人ポーラ美術振興財団
協賛：東京都写真美術館支援会員
協力：イタリア文化会館 東京

測量技師としてのキャリアを経て、コンセプチュアル・アーティストたちとの出会いを契機に、1970年代より本格的に写真家としての活動を開始した、イタリアの写真家ルイジ・ギッリ（1943-1992）の個展。ギッリは、写真を現実世界の単なる複製としてではなく、フレーミングされた視覚的断片によって風景を構成するための表現手段として捉え、通り過ぎる風景の中に現実とイメージの関係性を見出してきた。

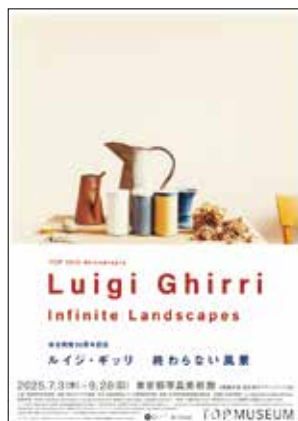
本展では、イタリアの作家遺族から借用した作品を中心に、当館収蔵品をあわせて構成し、1970年代から晩年にかけてギッリが撮影したイタリア各地の風景、アーティストのスタジオ、自宅の室内、看板やポスター、窓や鏡に映り込む風景など、多様な視覚的断片による風景表現を紹介した。あわせて、ギッリの活動を語るうえで欠かせない存在であり、自身グラフィック・デザイナーとして活動した妻パオラ・ボルゴンゾーニ（1954-2011）の作品および関連資料も展示し、約20年にわたるギッリの写真実践と、その多角的な思索の変遷を示した。

本展会期中、在日イタリア大使館およびイタリア文化会館の協力のもと、イタリア文化会館 東京にてシンポジウム「ルイジ・ギッリ〈ジョルジョ・モランディのアトリエ〉シリーズをめぐって」を共催。2025年12月12日から2026年3月15日にかけて、ハンミ美術館（韓国）にて本展巡回展を開催。

出品作家：ルイジ・ギッリ、パオラ・ボルゴンゾーニ
出品点数：138点
入場者数：49,097人
企画：山田裕理

展覧会図録

『ルイジ・ギッリ 終わらない風景』
執筆者：アデーレ・ギッリ、イラリア・カンピオーリ、パオラ・ギッリ、ホンマタカシ、山田裕理
編集・発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家vol.22

TOP 30th Anniversary

Thoughts of a Distant Window:

Contemporary Japanese Photography vol. 22

期間：令和7年9月30日（火）～令和8年1月7日（水）83日間
会場：3階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞
協賛：東京都写真美術館支援会員

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するとともに、新たな創造活動を紹介することを目的として、2002年より継続的に「日本の新進作家」展を開催している。

第22回となる本展では、人と時代の流れ、場所、風習といった物事との結びつきから生まれる小さな物語に焦点をあてた5名の新進作家の作品を紹介した。多様性の尊重やインクルーシブな社会が求められる、異なる価値観を持つ人々とのコミュニケーションや共に生きることの想像力が重要になっている今日。

5名の作家が表現する写真・映像作品との出会いから、窓から垣間見える暮らしを想像するように、誰かや何かに寄り添うための想像力を育む機会とした。

出品作家：寺田健人、スクリプカリウ落合安奈、甫木元空、岡ともみ、呉夏枝
出品点数：66点
入場者数：25,389人
企画：大崎千野

展覧会図録

『総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家vol.22』
執筆者：寺田健人、スクリプカリウ落合安奈、甫木元空、岡ともみ、呉夏枝、大崎千野
編集・発行：東京都写真美術館



恵比寿映像祭2026

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2026

あなたの音に | 日花聲音 | Polyphonic Voices Bathed in Sunlight

期間：令和8年2月6日(金)～2月23日(月・祝) 16日間
※コミッション・プロジェクト&東京都コレクション(3F展示室)のみ3月22日(日)まで

主催：東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/日本経済新聞社

共催：サッポロ不動産開発株式会社/公益財団法人日仏会館

助成：プリティッシュ・カウンシル

協力：在日オーストラリア大使館

後援：台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター/J-WAVE 81.3FM

協賛：YEBISU BREWERY TOKYO/東京都写真美術館支援会員/ダイワロイネットホテル西新宿PREMIER

恵比寿映像祭2026では、テーマを「あなたの音に|日花聲音| Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」と題し、映像や写真の役割への問いかけを継続しながら、より柔らかな視点で社会状況の変化を考察した。映像祭をプラットフォームとして、様々な声を展開し、映像・写真だけでなく、サウンドや演劇などの表現も、新たな試みとして取り入れた。地下1階展示室は本祭の出発点になり、移動(遷徙)ということから語り始め、環境の中で異なる声が交差する中では共通点がありながらも、解釈のズレなども生じることがある視点から問いかけ、それぞれの作家が自らの背景から生み出した映像・写真の表現を通して、アイデンティティ、歴史記憶や社会という普遍的な事柄への、多種多様な問いかけを掘り下げた。また、3階展示室では、第2回コミッション・プロジェクトの特別賞を受賞した小森はるか作品、および東京都コレクションが、総合テーマを紐解く視点とし、「現代と歴史」を切り口に都立ミュージアムが管理する作品を横断的に構成した。美術館の外では展開するオフサイトや連日に上映、ライブ・イベント、シンポジウムなどを行い、テーマともに多様な見方をあぶり出した。

展示|東京都写真美術館

○3階展示室

コミッション・プロジェクト特別展示

小森はるか

東京都コレクション

大木裕之/田中未知/高松次郎/溪斎英泉/川崎霞峰/十返舎一九/全日本写真材料商組合連合会/エキソニモ/さわひらき/松井写真館/原直久/ギュスターヴ・ル・グレイ/フェリーチェ・ベアト/ロジャー・フエント

○2階展示室およびロビー

アンジェリカ・メシテ/侯怡亭(ホウ・イーティン)/チョン・ソジュン/FAMEME/田中未知/高松次郎/スーザン・ヒラー/エキソニモ

○地下1階展示室

張恩滿(チャン・エンマン)/鶴巻育子/トモコ・ソヴァージュ/キュンチュオメ/冥丁

○オフサイト展示

FAMEME(恵比寿スカイウォーク)

エキソニモ(恵比寿ガーデンプレイスセンター広場)

上映|東京都写真美術館1階ホール

- ①河合健《みんな、おしゃべり!》
- ②モーガン・クウェインタンス特集：発話行為&イメージの合唱
- ③《エクスネ・ケディの白日夢》+幽体離脱ライブ(井手健介、甫木元空)
- ④チョン・ソジョン特集《Overtone—潜む音の層》
- ⑤音の風景：小杉武久とタージ・マハル旅行団の映像と音楽
- ⑥佐藤真《阿賀に生きる》[コミッション・プロジェクト特別企画①]
- ⑦佐藤真《阿賀の記憶》[コミッション・プロジェクト特別企画②]
- ⑧小森はるか《春、阿賀の岸辺にて》[コミッション・プロジェクト特別企画③]
- ⑨大木裕之《meta dramatic 劇的》+《ウム/オム1》ほか[大木裕之追悼特集]
- ⑩山本薩夫《戦争と人間》三部作[大木裕之追悼特集]

ライブ・イベント

- ゴツプロ!×戯劇場 共同制作《敬啓者》(拝啓)
- トモコ・ソヴァージュ《Waterbowls》
- 冥丁パフォーマンス
- 張恩滿(チャン・エンマン)「針と糸と料理で紡ぐ—原住民族文化の体験ワークショップ」
- 鶴巻育子「見える人、見えない人、見えづらい人が集まり、言葉で見る写真鑑賞ツアー」

シンポジウム

○東京都写真美術館1階ホール

映画・映像における多声的な言語

パネリスト：キャメロン・L・ホワイト(アジア言語・文化研究者、ミシガン大学博士課程在籍)、メー・アーダーン・インカワニット(映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授)、三澤真美恵(華語映画研究者、日本大学文理学部中国語中国文学学科 教授)

モデレーター：邱于瑄

映像表現の現在地とこれから—第3回コミッション・プロジェクトに向けて
パネリスト：沖啓介(メディア・アーティスト)、斉藤綾子(映画研究者、明治学院大学教授)、レオナルド・バルトロメウス(山口情報芸術センター[YCAM]、Gudskul Ekosistemキュレーター)、メー・アーダーン・インカワニット(映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授)

モデレーター：田坂博子

受け継がれるデジタルの声—マイグレーション、エミュレーター、そしてエコー

パネリスト：マイケル・コナー(Rhizomeエグゼクティブ・ディレクター)、赤岩やえ[エキソニモ](出品作家)、千房けん輔[エキソニモ](出品作家)

モデレーター：田坂博子

○日仏会館ホール

[日仏会館共催企画] あるがままの音へ

パネリスト：トモコ・ソヴァージュ(出品作家)、東岳志(サウンドエンジニア、山食音 代表)、柳沢英輔(音文化研究者)

司会モデレーター：川出良枝(放送大学教授、日仏会館 学術・文化事業委員会委員)、山崎香穂

アーティスト・トーク

アーティスト・トーク：アンジェリカ・メシテ

出演：アンジェリカ・メシテ、邱于瑄

アーティスト・トーク：鶴巻育子

出演：鶴巻育子、舟之川聖子、邱于瑄

アーティスト・トーク：原直久

出演：原直久、高橋則英(日本写真芸術学会会長)、三井圭司

展覧会事業

□アーティスト・トーク キュンチョメ
出演：キュンチョメ、山崎香穂

教育普及プログラム

- ①TOPボランティアによるオープンワークショップ 手作りアニメーション
- ②TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム
- ③ダンス・ウェル
- ④地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム「恵比寿映像祭でじっくりみてみよう!」
- ⑤筆談鑑賞会 手話通訳付き インクルーシブワークショップ

社会共生の取り組み

- ①情報保障
- ②音声による「やさしいガイド」
- ③オール・ウェルカム・デー (2月14日 [土])
- ④バリアフリー設備
- ⑤総合受付のサポート
- ⑥来館の前に
 - ・恵比寿駅からのバリアフリールート案内 (美術館ウェブサイト)
 - ・館内案内動画 (手話、音声ガイド、日本語字幕付き) (Youtube)
 - ・アクセシビリティ情報ページ「だれでもTOP」(美術館ウェブサイト)

地域連携プログラム

公益財団法人日仏会館・TMF日仏メディア交流協会/YEBISU GARDEN CINEMA/工房親/MuCuL/MEM/AL/POETIC SCAPES/景丘の家/Koma gallery/POST/Galerie LIBRAIRIE6/EMERGING恵比寿2026/LAID BUG/シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]/Spincoaster Music Bar Ebisu/Music Bar Suppage/WALL_alternative/味の飲食街

出品作家・ゲスト数：57名

出品点数：63点 展示32点 (25作家)、上映24点 (10プログラム12作家)、ライブ・イベント9事業、オフサイト3点

入場者数：111,364人 (地域連携施設 (9,488名) 及びコミッション・プロジェクト3F展示室延長期間 (2月25日～3月22日) は含まず)

メインキュレーター：邱于瑄

キュレーター：邱于瑄、田坂博子、山崎香穂、三井圭司

教育普及プログラム：下倉久美、佐藤真実子、中野敬子、松澤優

アクセシビリティ：舟之川聖子、中野敬子

学芸統括：丹羽晴美

広報：坂田めぐみ、久代明子、池田良子

進行管理・企画補佐：堂前佳穂

恵比寿映像祭2026事務局：エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社

公式ガイドブック

企画：東京都写真美術館 (邱于瑄、田坂博子、山崎香穂、三井圭司)

寄稿：FAMEME/ユ・チェンタ、鶴巻育子、キャメロン・L・ホワイト

翻訳：池田哲

編集：櫻井拓 (のほ本)、東京都写真美術館

進行管理：堂前佳穂

制作進行：エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社

イラストレーション：ひらのりょう

デザイン：田中せり、高坂彩乃

協力：畑ユリエ

発行：東京都写真美術館

3Fリーフレット (コミッション・プロジェクト&東京都コレクション)

企画：東京都写真美術館 (邱于瑄、田坂博子、山崎香穂、三井圭司)

翻訳：池田哲

編集：櫻井拓 (のほ本)、東京都写真美術館

進行管理：堂前佳穂

制作進行：エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社

イラストレーション：ひらのりょう

デザイン：田中せり、高坂彩乃

協力：畑ユリエ

発行：東京都写真美術館

エキソニモ・マイグレーション・プロジェクト冊子

企画：東京都写真美術館

翻訳：池田哲

編集：櫻井拓 (のほ本)、東京都写真美術館

進行管理：堂前佳穂

制作進行：エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社

デザイン：畑ユリエ

発行：東京都写真美術館



ロバート・キャパ 戦争

Robert Capa WAR

期間：令和7年3月15日(土)～5月11日(日) 36日間(令和7年4月1日以降の開館日数)

会場：地下1階展示室

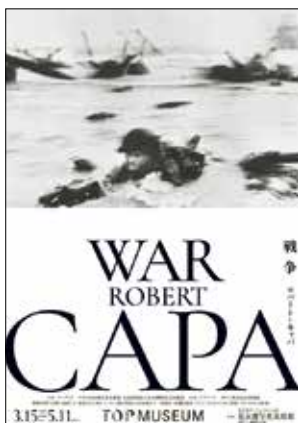
主催：株式会社クレヴィス
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
協賛：株式会社アイワード
協力：東京富士美術館

20世紀が生んだ偉大な写真家のひとり、ロバート・キャパ。その写真の背景には苦闘するヒューマニストの眼があり、また、戦争の苦しみをとらえるとき、そこにキャパの人間としてのやさしさ、ユーモアがあった。キャパは人間を取り捲く状況を少しでもよいものにしようというつよい信念と情熱をもって状況に身を投じたが、それだけでなく写真のもつ衝撃力を見分ける確かな眼も持ち合わせていた。

1930年代ヨーロッパの政治的混乱、スペイン内戦でドイツ・イタリアのファシスト政権に支援されたフランコ將軍の反乱軍によって次第に圧倒されて敗北する共和国政府軍、日本軍による中国の漢口爆撃、第二次世界大戦で連合軍の対ドイツ反攻作戦の始まる北アフリカから、イタリア戦線、ノルマンディー上陸作戦などの戦闘現場に立会い、命がけの取材写真は眼に見える確かな記録として報道した。それらの多くは時空を越えて、後世の人びとにも訴えかけるつよいメッセージとなっている。

本展では、東京富士美術館が所蔵する約1000点のコレクション・プリントから、「戦争」に焦点を当てた作品約140点を厳選し、展覧する。

出品点数：144点
入場者数：17,088人



第50回 2025 JPS展

2025 the 50th Exhibition of the JPS

期間：令和7年5月17日(土)～5月25日(日) 8日間

会場：地下1階展示室

主催：公益社団法人日本写真家協会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：文化庁/東京都

公益社団法人日本写真家協会(略称JPS)は全国に1,300名余りの会員を擁する職業写真家の団体である。本展は当協会創立の翌年1951年に「日本写真家協会 第1回展」を開催、76年に「JPS展」と名称を新たにし、77年からは一般公募を開始した。91年から写真学生を対象とした「ヤングアイ」も開催。デジタル写真の普及により、写真がより身近になっていくなか、JPS展に対する関心も高まり、毎年全国からの多数の応募を記録している。写真展として高い評価を受け、現在ではプロの写真家への登竜門の役割を担っている。

プロ、アマチュアを問わず一般からの公募を通して、優れた作品を制作した写真家を顕彰し、「第50回2025JPS展」では、すべての入賞・入選作品を展示。併せて、大学・専門学生を対象とした企画展示「ヤングアイ」やJPS会員の作品の展示も同時に実施した。

出品点数：333点(502枚)
入場者数：3,806人

展覧会図録

『第50回2025 JPS展図録』

発行：公益社団法人日本写真家協会



被爆80年企画展 ヒロシマ1945

HIROSHIMA 1945: Special Exhibition 80 Years after Atomic Bombing

期間：令和7年5月31日(土)～8月17日(日) 68日間
会場：地下1階展示室

主催：中国新聞社／朝日新聞社／毎日新聞社／中国放送／共同通信社
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：広島市／日本放送協会／日本写真家協会／日本ユネスコ国内委員会／広島県／(公財) 広島平和文化センター
協力：株式会社フレームマン／株式会社写真弘社／広島国際文化財団

第2次世界大戦末期の1945年8月6日午前8時15分、米軍がB29爆撃機「エノラ・ゲイ」から人類史上初めて、都市上空に原子爆弾を投下した。あの日広島が、3日後に長崎がただ一発の爆弾によって焦土と化した。その頃、自ら被爆しながら、あるいは放射線被曝の急性障害に苦しむ人間の姿に衝撃を受けながら、カメラを手に原子野を歩いた者たちがいた。広島では年末までに推計で14万人が犠牲になったとされる。あれから80年となる2025年、広島市民、報道機関のカメラマンや写真家の手による広島原爆写真162点と映像2点を展示した。資料の所蔵や保存・活用に携わってきた報道機関が連携し、原爆写真と映像の展覧会を主催するのは初の試みであった。

なお、本展覧会は、2023年に報道機関と広島市が共同で国連教育科学文化機関(ユネスコ)「世界の記憶」に国際登録を申請した「広島原爆の視覚的資料—1945年の写真と映像」(写真1532点、映像2点)を基に構成した。それらは、敗戦直後の混乱や占領期の報道統制に撮影者があらい、自ら守り抜いた資料でもある。

出品点数：164点
入場者数：37,309人

展覧会図録

『記録写真集 被爆80年企画展 ヒロシマ1945』
執筆：中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、中国放送(RCC)、共同通信社、日本放送協会(NHK)
編集：中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター(金崎由美)
監修：西本雅実
編集補助：松浦康高
発行：中国新聞社



プリピクテ Storm／嵐

Prix Pictet Storm

期間：令和7年12月12日(金)～令和8年1月25日(日) 36日間
会場：地下1階展示室

主催：プリピクテ
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

Prix Pictet (以下、プリピクテ) は、写真と地球の持続可能性(サステナビリティ)を主題とする世界有数の写真賞であり、2008年にピクテ・グループによって創設された。写真の力を通じて、サステナビリティという今日のかつ重要な課題に対する社会的関心を喚起することを目的としている。本賞は隔回ごとにサステナビリティに関するテーマを設定し、それに基づく展覧会を開催しており、今回で第11回目を迎えた。

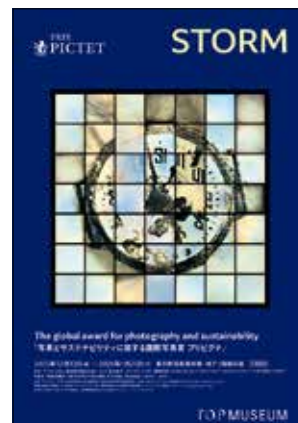
本展「プリピクテ Storm／嵐」では、第11回プリピクテ受賞者であるアルフレド・ジャーをはじめ、最終選考に選出された12名の写真家による作品が展示された。出品作家たちは、「嵐」というテーマを多角的に捉え、現代社会が直面する最も喫緊の課題、特に加速する気候危機が環境および社会に及ぼす影響について、深い考察を行っている。

展示作品の多くは、差し迫る危機や悲劇を想起させる強い表現を伴う一方で、未来への希望や再生の可能性を示唆するものも含まれており、鑑賞者に対して地球の守り手としての人間の責任と役割を問い直す契機を与える内容となっていた。本展は、プリピクテが創設以来掲げてきた「地球規模の持続可能性(グローバル・サステナビリティ)」という主題を、あらためて力強く提示する展覧会であった。

出品点数：96点
入場者数：12,724人

展覧会図録

『Prix Pictet STORM』
編集：Prix Pictet, Hatje Cantz Verlag
発行：Hatje Cantz Verlag



APAアワード2026 第54回公益社団法人日本広告写真家協会 公募展

期間：令和8年2月28日（土）～3月15日（日）14日間
会場：地下1階展示室

主催：公益社団法人日本広告写真家協会（APA）
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：経済産業省／文化庁／東京都
協賛：OMデジタルソリューションズ株式会社／キャノンマーケティングジ
ャパン株式会社／株式会社玄光社／ソニーマーケティング株式会
社／株式会社ニコン イメージングジャパン／富士フイルムイメー
ジングシステムズ株式会社／株式会社フレームマン
協力：法人賛助会員各社

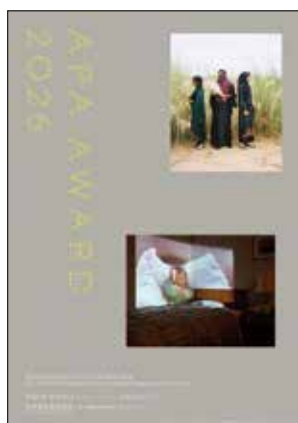
APAアワードは1961年より開催されている歴史ある写真の公募展
で、これまで多数の写真家を数多く輩出してきた。「広告作品部門」
は実際に世の中に流通した広告写真から審査・選出し、「写真作品
部門」はテーマに沿って自由な発想と写真表現で競い合う写真コン
ペティション。

今年度、広告作品部門は198作品の応募があり、49の作品が入賞
入選に選ばれた。トップ作品はポスター展示をし、他入賞入選作
品はモニターで展示を行った。写真作品部門のテーマは「鼓動」。
全国から1074作品、3724枚の応募があり、88の作品が入賞入選に
選ばれ、全入賞・入選作品を展示した。

出品点数：88点
入場者数：3,658人

展覧会図録

『年鑑 日本の広告写真2026』
監修：公益財団法人日本広告写真家協会



養老孟司と小檜山賢二の虫展～みて、かんじて、そしてかん がえよう

Insects: AN Exhibition by Takeshi Yoro and Kenji
Kohiyama—Look, Feel, and Think

期間：令和8年3月21日（土）～5月24日（日）9日間（令和8年3月31日ま
での開館日数）
会場：地下1階展示室

主催：株式会社クレヴィス
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
特別協力：フマキラー株式会社／三和興業ホールディングス株式会社／
株式会社ミマキエンジニアリング
協力：有限会社養老研究所／足立真穂／株式会社STU研究所／合同会
社カウコカイク工房／株式会社スタジオ・ネモ／株式会社NILL／
芝浦工業大学工学部インタラクティブグラフィックス研究室／岡篤
郎／田村克徳／養老昆虫クラブ
アートディレクション：Swimming

解剖学者で、大の虫好きとしても知られる養老孟司。そして、対象
物の全てにピントがあう深度合成技法を駆使し、昆虫写真の新た
な可能性を切り拓いた小檜山賢二。長年の虫友だちであるふたりの
展覧会。

深く考え抜かれた養老先生の言葉と、虫たちを数百倍に大きくした
小檜山先生の写真を、小さきまざまなパネルや立体展示物、映像
として展示。

驚きと不思議に満ちた虫たちの「なんだ、これは？」の世界を、楽
しんでいただく契機とした。

こたえはぜんぶ、虫にある。
かたちを見る。すべてはそこから始まった。
ありのままを見ればいいんです。木の枝の葉っぱをよく見てください。
あの葉っぱ一枚が、すべての答えでしょう。
虫だってそう。もう、答えはそこにある。
自然からの答えは、もう目の前にあるのです。—養老孟司

出品点数：64点
入場者数：2,091人（令和8年3月31日現在）

展覧会公式写真集

『養老孟司と小檜山賢二 虫本』
執筆者：養老孟司、小檜山賢二
発行：株式会社クレヴィス



学校向けプログラム

スクールプログラム

東京都写真美術館では、児童・生徒が写真・映像メディアとの出会いを通して豊かな体験学習ができるように、小学校、中学校、高等学校の授業や部活動、教職員研修等と連携したスクールプログラムを実施している。制作体験と作品鑑賞の両方を一度に体験できる当館のスクールプログラムは、表現と鑑賞の両面から、写真・映像の仕組みと楽しさを体験的により深く理解できる点が大きな特色となっている。また、大学生のためのプログラムとして、博物館実習の受入れのほか、専門性や要望にあわせ展覧会解説などを行っている。

実施回数：31回
参加人数：457人

児童・生徒のためのプログラム

暗室での写真制作体験 フォトグラム

実施回数：8回 参加人数：114人
暗室でモノクロ写真印画紙を用いてプリント技法を体験するプログラム。フォトグラムは、当館で用意したモチーフや各自で持参したものなど、様々なもののかたちや影を印画紙に直接写し取る制作方法である。カメラに頼らない自由な造形活動により、もののかたちの多様さを実感しながら、写真ならではの光と影による表現を体験することができる。



手作りアニメーション体験—おどろき盤とマジカループ

実施回数：3回 参加人数：70人

おどろき盤（フェナキスティスコープ）は、19世紀を起源とするアニメーション装置である。特製の円盤型の用紙に自由に絵を描き、鑑賞することを通してアニメーションの仕組みを体験的に学びながら、世界にひとつしかないおどろき盤を制作するプログラム。また「おどろき盤」を元にしたWebアプリ「マジカループ」では、タブレット端末やPC等のデジタル・デバイスを活用して回転アニメーションの世界を体験的に学ぶことができる。どのようにしたら動いて見えるのかを観察し自ら考える能動的学習、自身で描くことによってアニメーション表現を行う体験的理解、完成作品を仲間と共有するコミュニケーションという3つの学びを楽しみながら行うことができる。



特別支援学級の受け入れ

特別支援学校、特別支援学級の児童・生徒を対象としたスクールプログラムを実施している。

学校ごとに担当の教員と相談しながら、写真・映像作品の自由鑑賞や制作・表現活動などのプログラムを組み立てており、実施の際は、学芸員や当館ボランティアがサポートを行った。

今年度は、3校の特別支援学校と5回のプログラムを実施し、当館ボランティアのサポートのもと、暗室体験や展覧会鑑賞等をおこなった。また、遠方で来館が困難な学校との初めての試みとして、郵送とメールによる遠隔指導と出張指導を組み合わせ、写真撮影と発表、講評を行うプログラムを実施した。

実施回数：5回
学校数：3校
参加人数：90人



先生のためのプログラム

教員向け美術館見学体験会

東京都内の図工・美術教員の研究会の訪問を受け、当館のスクールプログラムの説明、プログラムの体験、学校で行う授業での活用方法などを先生方の希望に応じて組み立て、紹介した。

実施回数：2回

参加人数：49人

参加団体：葛飾区図画工作研究会、新宿区図工部会

TOPティーチャーズweek

都内の小・中・高等・特別支援学校の先生方を対象に、当館主催展覧会を無料で鑑賞できる日を設定した。当館の施設や、展示作品から写真・映像作品を活用した授業展開のアイデアを得たり、展覧会の構成やテーマ、作品の展示方法などから学校展覧会のヒントを見つけたりなど、先生方の自己研鑽とともに、学校での来館の検討に役立ててもらう機会とした。

実施期間：

第1回 2025年4月17日(木)～4月25日(金)

対象展覧会：「TOPコレクション 不易流行」「鷹野隆大 カスパーこの日常を生きのびるために」

第2回 2025年7月17日(木)～7月25日(金)

対象展覧会：「TOPコレクション トランスフィジカル」「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」

第3回 2025年10月16日(木)～10月24日(金)

対象展覧会：「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」「作家の現在 これまでとこれから」「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」

大学生のためのプログラム

専門大学生のためのプログラム

大学の授業での来館に対応し、学芸員による展覧会解説のほか、当館概要や事業についてのレクチャーなど、専門性に合わせたプログラムを実施した。

実施回数：9回

参加人数：129人

受入大学：東邦大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学、上智大学、青山学院大学、桜美林大学、帝京科学大学、清泉女子大学



博物館実習（学芸員実習）

博物館実習は、博物館法施行規則第1条に基づき、大学において修得すべき博物館に関する科目の一つとされており、登録博物館または博物館相当施設での実習により修得するものとされる。当館の博物館実習（学芸員実習）は大学生と大学院生を対象に、将来的な学芸員の養成や美術館の仕事への意識啓発を目的として、学芸員を中心とした各部署の業務を体験的に研修してもらう機会である。

実習日数：10日間

受入日程：令和7年8月1日(金)～8月29日(金)のうち延べ11日間
※実習日程10日間のうち、1日は人数を2つに分け2日間で行ったため、延べ11日間とした。

受入人数：12人

受入大学：桜美林大学、京都芸術大学、女子美術大学、東京工芸大学、東京造形大学、東京都立大学、東京農業大学、日本大学、明治学院大学、明治大学、武蔵野美術大学、立教大学



令和7年度 スクールプログラム実績

年月日	来館時間	団体名	対象・学年	区分	人数	実施場所	プログラム内容	暗室現像体験	アニメーション	キャラクターコンパニオン	
1	4月17日(木)~4月25日(金)	第1回ティーチャーズweek	教員		0	当館展示室	展覧会見学「TOP コレクション 不易流行」「鷹野隆大 カスバパーこの日常を生きるためにー」				
2	5月9日(金)	15:00-16:20 東邦大学 看護学科	大学生	授業等	22	当館展示室	「不易流行」展 担当学芸員によるギャラリートーク、色と形と言葉のゲーム			22	
3	5月13日(火)	14:30-16:30 武蔵野美術大学	大学生、大学院生	授業等	21	当館展示室	「不易流行」「鷹野隆大 カスバパーこの日常を生きるためにー」展 担当学芸員によるギャラリートークと質疑応答			21	
4	5月15日(木)	13:00-14:30 多摩美術大学	大学院生	授業等	13	当館展示室	「不易流行」展 担当学芸員によるギャラリートークと質疑応答			13	
5	5月28日(水)	14:00-15:00 東洋女子高等学校	高校1年生	授業等	15	当館スタジオ、展示室	「不易流行」展 担当学芸員によるギャラリートーク、色と形と言葉のゲーム			15	
6	5月29日(木)	15:00-15:30 愛知県犬山市東部中学校	中学3年生	授業等	5	当館2階ロビー	学芸員の仕事についての質疑応答、展覧会鑑賞				
7	6月25日(水)、6月26日(木)	目黒区大島中学校	中学2年生	職場体験	2	当館スタジオ、展示室、事務室	受付案内業務やスタジオ備品の整理など美術館業務を体験、展覧会鑑賞				
8	7月17日(木)~7月25日(金)	第2回ティーチャーズweek	教員		24	当館展示室	展覧会見学「TOP コレクション トランスフィジカル」「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」				
9	7月17日(木)	15:30-16:00 上智大学	大学生	授業等	15	当館展示室	当館活動についてのレクチャー、展覧会鑑賞			15	
10	7月18日(金)	14:00-16:00 明治学院高等学校	高校1~3年生	部活動	10	当館スタジオ、展示室	デジタルネガに密着プリント、展覧会鑑賞	10			
11	7月25日(金)	13:30-16:30 葛飾区工工会	教員	教員向け美術館見学体験会	23	当館スタジオ	おどろき盤・マジカループ、展覧会鑑賞		23		
12	7月29日(火)	14:00-15:30 青山学院大学	大学生	授業等	7	当館展示室	「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展担当学芸員によるギャラリートーク			7	
13	8月1日(金)、5日(火)、7日(木)、8日(金)、19日(火)、21日(木)、22日(金)、23日(土)、24日(日)、28日(木)、29日(金)	博物館実習	大学生、大学院生	博物館実習	12	当館スタジオ					
14	9月10日(水)	16:30-18:00 武蔵野美術大学	大学生	授業等	10	当館展示室	「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展 担当学芸員によるギャラリートーク			10	
15	9月28日(日)	10:00-12:00 科学技術学園高等学校 写真部	高校1~3年生	部活動	7	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	7			
16	10月5日(日)	11:00-13:30 千葉湖北特別支援学校	高校1~3年生	部活動	9	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	9			
17	10月15日(水)	14:00-16:00 新宿区工工会	教員	教員向け美術館見学体験会	26	当館スタジオ、展示室	おどろき盤・マジカループ、展覧会鑑賞		26		
18	10月16日(木)~10月24日(金)	第3回ティーチャーズweek	教員		8	当館展示室	展覧会見学「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」「作家の現在 これまでとこれから」				
19	10月17日(金)	10:00-12:00 アメリカンスクールインジャパン	中学2年生	授業等	11	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	11			
20	10月31日(金)	都立八王子西特別支援学校	高校1年生	授業等	33	遠隔	写真作品の講評				
21	11月2日(日)	10:00-12:00 八丈町立大賀郷中学校 美術部	中学1~3年生	部活動	12	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	12			
22	11月11日(火)	13:30-16:00 東京都立港特別支援学校 職能開発科	高校2年生	授業等	18	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	18			
23	11月12日(水)、11月13日(木)	都立白鷗高校附属中学校	中学2年生	職場体験	2	当館スタジオ、展示室、事務室	受付案内業務やスタジオ備品の整理など美術館業務を体験、展覧会鑑賞				
24	11月15日(土)	10:00-10:30 桜美林大学	大学生	授業等	17	当館展示室	当館活動についてのレクチャー、展覧会鑑賞			17	
25	11月22日(土)	14:30-16:00 帝京科学大学	大学生	授業等	8	当館展示室	「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」展 担当学芸員によるギャラリートーク、色と形と言葉のゲーム			8	
26	12月6日(土)	13:00-16:00 日本写真芸術専門学校	専門学校生	授業等	13	当館展示室、2階・3階ロビー	「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」展 担当学芸員によるレクチャー、展覧会鑑賞			13	
27	12月9日(火)	10:00-12:00 渋谷区立長谷戸小学校	小学5年生	授業等	23	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	23			
28	12月11日(木)	10:00-12:00 渋谷区立長谷戸小学校	小学5年生	授業等	24	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞	24			
29	12月18日(木)	13:00-13:45 14:00-14:45 都立八王子西特別支援学校	高校1年生	授業等	30	都立八王子西特別支援学校	写真作品の講評				
30	12月19日(金)	14:00-16:00 科学技術学園高等学校	高校1年生	授業等	21	当館スタジオ、展示室	おどろき盤・マジカループ、展覧会鑑賞		21		
31	1月10日(金)	10:00-12:00 清泉女子大学	大学生	授業等	16	当館スタジオ、展示室	当館普及事業についてのレクチャー、色と形と言葉のゲーム、展覧会鑑賞			16	
合計31回					457人			計	114人	70人	157人

パブリックプログラム

パブリックプログラム事業では、体験的なプログラムによって、参加者の写真・映像への理解を促進し、生きる力やコミュニケーション力を高めるきっかけを提供している。様々な世代、多様な関心を持つ人々が美術館を楽しみ、学ぶことができる場を創出することもまた事業の大きな目的のひとつである。令和7年度は定番プログラムとして、「モノクロ銀塩プリントワークショップ」や「手作りアニメーション体験」のオープンワークショップを実施した。夏休みには、こどもとその保護者を対象に、近隣施設の景丘の家との共同ワークショップや、ファミリープログラム「じっくり見たり、つくったりしよう!」などを開催した。障害の有無にかかわらず多様な背景を持つ方々を対象にしたプログラムとしては、9年目となる「インクルーシブ鑑賞ワークショップ 見るときき見えぬ、のち話す、したいに見える」や目黒社会福祉協議会との共催事業などの他、今年度より新たに「耳の聞こえない鑑賞案内人」小笠原新也氏による「インクルーシブプログラム『手話を交えたQ&Aショー』」を実施した。また、パーキンソン病と共に生きる方を主な対象に作品鑑賞体験をからだ全体で表現するダンス・プログラム「ダンス・ウェル」を実施した。その他、昨年度から開始した「ビジネスパーソン対象 対話型鑑賞会」、「暗室での現像体験」のオープンワークショップは今年度も引き続き実施し、後者は一般向けとファミリー向けの2回にわたって行った。これに加え、昨年度恵比寿映像祭の教育普及プログラムとして実施し好評を得た「図書室夜話」をパブリックプログラムとしては初めて開催したほか、大学機関との連携による教育普及事業を開始し、日本大学芸術学部写真学科との共催による「4×5カメラでポートレート撮影に挑戦!」大判写真制作ワークショップを開始した。

実施回数 32回
参加人数 450人

●モノクロ銀塩プリントワークショップ

初めての方が気軽に写真現像を体験できる制作系ワークショップ。暗室をもつ当館の特色を生かして、1999年以来、不定期ではあるが継続して開催してきた。デジタル世代のための写真現像体験として格好のプログラムとなっている。近年は若年層の参加者も増え、幅広い世代の参加者が、各自持参したネガフィルムより、それぞれがイメージする写真の仕上がりを目指し、当館スタッフのアドバイスをもとにモノクロ・プリントを制作した。



●オープンワークショップ：手作りアニメーション体験

当館特製の円盤型の用紙に絵や図形を描き「おどろき盤」*を作成し、世界に一つだけのオリジナルアニメーションを制作してみるプ

ログラム。こどもから大人までと一緒に、楽しみながらアニメーションの仕組みを学ぶことができる。当館オリジナルのデジタル教材「マジカループ」も併せて活用しながら、アナログ、デジタルの様々な方法で、アニメーション制作を体験した。今年度は、「渋谷おとなりサンデー」、「恵比寿文化祭2025」の開催日に合わせ当日自由参加形式のオープンワークショップとして実施し、こどもから大人までの多世代の参加者を得た。

*おどろき盤（フェナキスティスコープ）は、19世紀を起源とするアニメーション装置。円盤状の紙に絵や図形を少しずつ変化させながら描き、それを鏡に向かって回転させて、盤上のスリットを通して鏡に映る円盤を見ると、描いた絵が動画として知覚されるという仕組みとなっている。



●オープンワークショップ：暗室での現像体験

カメラやネガになじみのない人も、気軽に暗室で現像の体験をすることができるプログラムとして、デジタルネガを用いた暗室での現像体験ワークショップを昨年度に引き続き実施した。これは、当館にてあらかじめ制作したデジタルネガから、参加者が自由に選んだ1枚を密着させて、露光し現像を行うものである。人気の高い東京の名所や当館のある恵比寿のスポットだけでなく、季節に応じた植物や昆虫、飲み物などを写したデジタルネガを新たに加え、夏休みにはこどもと保護者を、冬期には広く一般を対象に実施し、各実施回をとおして小学生から大人まで、また、初心者から写真に詳しい人まで多くの関心を集め、多様な参加者が暗室での現像作業を楽しみながら体験する機会となった。



●景丘の家共同ワークショップ「東京都写真美術館に行ってみよう!「透けるもの」に光を当てて、写真を作る」

当館から徒歩4分に位置する「景丘の家」は、あらゆる世代が利用できる交流施設である。同施設との共同ワークショップとして、夏休みに小学生向けプログラムを実施した。写真（フォトグラム）の制作と鑑賞の両方を組み合わせたワークショップとした。フォトグラムのモチーフには、参加者の身の回りにあるさまざまな素材や形の「透けるもの」を持参してもらい、各々で選んだものの材質やレ

イアウトなどによって、光と影が様々な形や濃淡を写真の中に写す様子を体験した。でき上がった写真とモチーフをじっくり比較、観察することを促すことにより、光と影の効果や現像作業によって生まれるそれぞれの表現について、より実感をもって学ぶことができた。制作の後には「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」展を鑑賞し、白と黒からなる作品や、フォトグラムによる作品などを自身で制作した作品と比較したり、表現のねらいを考えてみるなど、写真の仕組みの理解と作品鑑賞とをあわせて体験する機会とすることができた。



●ファミリープログラム「じっくり見たり、つくったりしよう！」

小学生とその保護者が一緒に、写真の制作と鑑賞の両方を体験することができるプログラムとして、夏休みに実施。今年度も、夏の日光を最大限に活かして制作をすることができる青写真（サイアノタイプ）に焦点を当てた。青写真は太陽の光（紫外線）で焼きつける写真技法で、深い青色が特徴である。参加者には、制作する写真のモチーフとして、19世紀にこの技法が発明された際に用いられたモチーフに合わせて「身の回りの自然にあるさまざまな形のもの」を持参してもらった。前半に、当館自家製の印画紙と、参加者各自のモチーフや当館で用意した植物などを使い青写真を制作した。今年度はこれまでよりもやや大きな印画紙を準備し、参加した小学生と保護者がそれぞれの印画紙を並べて露光を行うようにしたことで、二人が選んだモチーフが互いの作品の中でつながっているような画面ができあがるなど、より多様な表現がうまれた。また、モチーフをはじめ、露光中の印画紙の色の変化、そして、水洗時の青色の細かな変化などをじっくりと見てもらい、観察の目と青に対する関心を高めることを促した。後半では、「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展を鑑賞した。写される色彩にこだわったギッリの作品を、青をキーワードにワークシートを用いながら各自で鑑賞した。参加者は、本プログラム全体を通じた「青」と「観察」というテーマを多様な形で体験することができた。



●図書室夜話

展覧会出品作家などが、選定した所蔵図書や写真集、お気に入りの本などを参加者と共にみながら、自身の作家活動や作品について語るプログラム。今年度は「総合開館30周年記念 遠い窓へ日本の新進作家 vol.22」では岡ともみ氏、「総合開館30周年記念作家の現在 これまでとこれから」では第1回目に藤岡亜弥氏、第2回目に石内都氏を迎え、図書室内にて実施した。各作家の話を通して作家本人の活動や出品作品への理解を深めるとともに、各作家が選んだ当館の蔵書にまつわる想いやエピソードなどをとおして、当館図書室や蔵書についての理解も深める機会となった。



●インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときき見えない、のち話す、しだいに見える」

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、ことばを交わしながら一緒に作品を鑑賞するワークショップ。見える人と見えない人の2人のナビゲーターとともに作品を鑑賞し、見えていることや感じていることを言葉にして伝え合いながら作品を鑑賞した。今年度は本プログラムを開始して9年目となり、「総合開館30周年記念」として開催した今年度の7つの展覧会のなかから、「鷹野隆大 カスババーこの日常を生きのびるためにー」展、「TOPコレクション 不易流行」展、「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展、「作家の現在 これまでとこれから」展の4展覧会について、対面形式を6回、オンライン形式を2回実施した。

講師：視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ



●社会福祉法人目黒社会福祉協議会共催事業「いどりぶれいす～美術館によっていこ～」

今年度は、共催事業として3年目を迎え、多様な背景を持つ子どもたちが、心地よく過ごせるインクルーシブな場づくりを目指し、ゆるやかに写真と映像でつながるプログラムを実施した。学校に行き渡りのある子どもや、障害のある子どもたちが、それぞれのペースでプログラムを利用し、ゆるやかに地域の人たちとつながり、安心して過ごせる場として美術館を認知してもらうことができた。



●「スマイルスタディールーム」体験的な学びの場

子どもたちへの学習や体験の支援、地域の中の遊び場、放課後の居場所づくりを行う「スマイルスタディールーム」（運営：NPO法人 めぐる子どもの場づくりを考える会 こどもば）の小中学生を夏休み期間中の平日に受け入れ、鑑賞や、暗室での写真制作を行い、「体験的な学びの場」づくりを実施した。



●インクルーシブプログラム「手話を交えたQ&Aショー」

「Q&Aショー」は、耳の聞こえない鑑賞案内人として各地の美術館で筆談鑑賞プログラムを行っている小笠原新也氏を質問者として迎え、出品作品や展覧会のコンセプトなどについて、手話と文字通訳を介して展覧会担当学芸員に質問するトークイベントとして今年度新たに開始した。「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」展と「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」展の2つの展覧会にあわせ、それぞれの展覧会の構成の特徴や、みどころ、鑑賞者としての素朴な疑問などに担当学芸員が答える対話形式でのトークを通し、プログラム参加者の鑑賞体験を促進した。



●「ダンス・ウェル」

インクルーシブな作品鑑賞体験プログラムとして、パーキンソン病と共に生きる方を主な対象に、こどもから大人まで一緒に参加できるダンス・プログラム「ダンス・ウェル」を今年度初めて実施した。今回は、「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展を作品の「色・光・影」に注目しながら鑑賞し、それぞれが思いうかべたイメージを、まずは色紙で作ったかたちを重ねて表わしてみた。その後、作品に沿った講師のインストラクションに促されな

がら、それぞれの鑑賞体験をからだ全体で表してみた。言葉ではなくからだの動きでそれぞれが作品から感じたことを表現してみるという新しい作品鑑賞体験を提示するとともに、多様な参加者同士の表現を共に交歓する試みとなった。

講師 なかむらくるみ（ダンス・アーティスト、カラダ媒介人、ダンス・ウェル講師）

アシスタント 酒井直之（ダンサー、映像作家、ダンス・ウェル講師）、Aokid（ダンサー、アーティスト）

東京都歴史文化財団施設間連携事業（東京都美術館、東京都渋谷公園通りギャラリー）



●ビジネスパーソン対象 対話型鑑賞会

昨年度に引き続き、対話型鑑賞に焦点を当てたビジネスパーソンを対象にしたプログラムを実施。対話型鑑賞の方法によって呼び起こされる観察力、思考力、想像力、傾聴力、逆転の発想などの様々な力を、ビジネスの場面で活用してもらうことを目的とした。対話型鑑賞のメソッドを用いた当館の教材「色と形と言葉のゲーム」や対話型作品鑑賞の体験と、そのメソッドとそれがアート思考に繋がることについてのレクチャー、さらには、実践編として、色と形のカードを国内外の具体的な場所や建物の写真に替えたゲームを実施した。多岐にわたる業種に携わる参加者が意見を交わし、学びを深めた。

講師：武内厚子（東京都江戸東京たても園 係長 学芸員）



●東京都写真美術館×日本大学芸術学部写真学科「4×5カメラでポートレート撮影に挑戦！」大判写真制作ワークショップ

新たな教育普及のあり方の調査研究の一環として、写真に関する総合研究を行う日本大学芸術学部写真学科と連携し、フィルムカメラのなかでも大判カメラの一つである4×5カメラを使ったポートレート写真の制作ワークショップを開始した。当館学芸員による4×5カメラとポートレート写真のレクチャーの後、日本大学芸術学部写真学科教授による、撮影と写真制作のアドバイスのもと、大判写真のスタジオポートレート撮影から、フィルム現像、暗室でのプリン

ト、できあがった写真のブックマット装まで、すべての工程を、2日間にわたって行った。撮影は2人1組となり、撮影するポートレートについて話し合い、モデルと撮影者でコミュニケーションを取りながら行った。フィルムカメラでの撮影や暗室での現像についてさまざまな経験を持つ参加者が集まり、参加者どうして協力しながら、一つ一つの工程を経て、じっくりと一枚の写真に仕上げることを体験することによって、日頃、直感的に撮影して共有するデジタル写真とは異なる、制作プロセスと表現の多様さ、写真作品の新たな魅力を発見する体験となった。

講師：服部一人（日本大学芸術学部写真学科 教授）

三井圭司（当館学芸員）



令和7年度 パブリックプログラム実績

開催日	プログラム名	講師・スタッフ	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	対象など
1 4月20日(日)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババーこの日常を生きのびるために」展の鑑賞	どなたでも
2 5月3日(土・祝)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	無料	オンライン	「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」展出品作品の鑑賞	どなたでも
3 5月18日(日)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	5	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババーこの日常を生きのびるために」展の鑑賞	どなたでも/手話通訳付
4 6月1日(日)	TOPボランティアによる手作りアニメーション・オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	35	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも/「渋谷おとなりサンデー」参加事業
5 6月7日(土)	インクルーシブプログラム「手話を交えたQ&Aショー」	小笠原新也・石田哲朗	26	無料	当館2階ロビー	「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」展のコンセプトや出品作品などについて、手話を介して展覧会担当学芸員に質問する	どなたでも/手話通訳付
6 6月8日(日)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」展の鑑賞	どなたでも/手話通訳付
7 6月15日(日)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	10	一般4,000円/学生3,000円/中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
8 6月21日(土)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	9	一般4,000円/学生3,000円/中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
9 7月19日(土)	ファミリープログラム「TOPボランティアによる暗室での現像体験オープンワークショップ」	当館ボランティアスタッフ	30	無料	当館スタジオ	デジタルネガ密着プリント	小学3-6年生とその保護者(2人1組)
10 7月31日(木)	スマイルスタディールーム「フォトグラムワークショップ」	社会包摂プログラムスタッフ	6	無料	当館スタジオ、展示室	フォトグラム制作、展覧会鑑賞	NPO法人めぐろ子どもの場づくりを考える会 こどもば参加者

開催日	プログラム名	講師・スタッフ	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	対象など
11 8月2日(土)	景丘の家共同ワークショップ「東京都写真美術館に行ってみよう! 透けるものに光を当てて、写真を作る」	教育普及プログラムスタッフ	10	無料	当館スタジオ、展示室	フォトグラムの制作、「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」展の鑑賞	小学3-6年生
12 8月11日(月・祝)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときとき見ええない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展の鑑賞	どなたでも
13 8月23日(土)	ファミリープログラム「じっくり見たり、つったりしよう!」	教育普及プログラムスタッフ	12	800円	当館スタジオ、展示室	青写真の制作、「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展の鑑賞	小学3-6年生とその保護者
14 8月24日(日)	ファミリープログラム「じっくり見たり、つったりしよう!」	教育普及プログラムスタッフ	12	800円	当館スタジオ、展示室	青写真の制作、「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展の鑑賞	小学3-6年生とその保護者
15 9月2日(火)	目黒区社会福祉協議会共催事業「いどりぶ、ぶれいす〜美術館によっていこ」	社会包摂プログラムスタッフ	8	無料	当館スタジオ、展示室	フォトグラム制作、いろいろなカメラの体験、マジカルルーブ、当館オリジナル動画「ネガぞう」視聴、館内散歩・展覧会鑑賞	主に目黒区在住の児童・青少年とその保護者
16 9月7日(日)	インクルーシブプログラム「手話を交えたQ&Aショー」	小笠原新也・山崎香穂	35	無料	当館2階ロビー	「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」展のコンセプトや出品作品などについて、手話を介して展覧会担当学芸員に質問する	どなたでも/手話通訳付
17 9月13日(土)	ダンス・ウェル(東京都歴史文化財団施設間連携事業)	講師: なかむらくるみ アシスタント: 酒井直之、Aokid	7	無料	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展鑑賞体験に基づくダンス・プログラム	どなたでも
18 9月15日(月・祝)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときとき見ええない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展の鑑賞	どなたでも/手話通訳付
19 10月11日(土)	TOPボランティアによる手作りアニメーション・オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	26	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも/「恵比寿文化祭2025」参加事業
20 10月12日(日)	TOPボランティアによる手作りアニメーション・オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	16	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも/「恵比寿文化祭2025」参加事業
21 11月15日(土)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	9	一般4,000円/ 学生3,000円/ 中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
22 11月16日(日)	ビジネスパーソン対象 対話型鑑賞会	武内厚子	7	6,000円	当館スタジオ	「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」展出品作品の対話型鑑賞とレクチャー、「色と形と言葉のゲーム」の体験	ビジネスパーソン/プログラム内で使用するコミュニケーションツール付
23 11月20日(木)	図書室夜話	岡ともみ	7	無料	当館図書室	「総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol.22」展出品作家が当館の蔵書をみながら語る	高校生以上
24 11月24日(月・休)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときとき見ええない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	6	500円	当館スタジオ、展示室	「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」展の鑑賞	どなたでも/手話通訳付
25 12月4日(木)	図書室夜話	藤岡亜弥	7	無料	当館図書室	「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」展出品作家が当館の蔵書をみながら語る	高校生以上
26 12月12日(金)	図書室夜話	石内都	11	無料	当館図書室	「総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol.22」出品作家が当館の蔵書をみながら語る	高校生以上
27 1月11日(日)	目黒区社会福祉協議会共催事業「いどりぶ、ぶれいす〜美術館によっていこ」	社会包摂プログラムスタッフ	41	無料	当館スタジオ、展示室	ポジフィルムのコラージュ制作と投影、いろいろなカメラの体験、マジカルルーブ、当館オリジナル動画「ネガぞう」視聴、館内散歩・展覧会自由鑑賞	主に目黒区在住の児童・青少年とその保護者
28 1月12日(月・祝)	TOPボランティアによる暗室での現像体験オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	65	無料	当館スタジオ	デジタルネガ密着プリント	小学生以上
29 1月17日(土)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときとき見ええない、のち話す、しだいに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	4	無料	オンライン	「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」展出品作品の鑑賞	どなたでも
30 1月24日(土)	東京都写真美術館×日本大学芸術学部写真学科「4×5カメラでポートレート撮影に挑戦!」大判写真制作ワークショップ	服部一人、三井圭司	8	15,000円	当館スタジオ	4×5カメラとポートレート写真に関するレクチャー、カメラの操作体験、ポートレート撮影、フィルム現像、プリント、ブックマット装、鑑賞	高校生以上
31 1月25日(日)	東京都写真美術館×日本大学芸術学部写真学科「4×5カメラでポートレート撮影に挑戦!」大判写真制作ワークショップ	服部一人、三井圭司	8	15,000円	当館スタジオ	4×5カメラとポートレート写真に関するレクチャー、カメラの操作体験、ポートレート撮影、フィルム現像、プリント、ブックマット装、鑑賞	高校生以上
32 3月14日(土)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	8	一般4,000円/ 学生3,000円/ 中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
合計32回 450人							

幅広い世代の人やさまざまな背景を持つ人が、お気に入りの作品を見つれたり、フェスティバルについて考えたり、制作を通して映像や写真についての理解を深めたりして、それぞれのペースで恵比寿映像祭2026を楽しむことができるよう、多数の教育普及プログラムを実施した。また事前申込制のものだけでなく、当日展覧会鑑賞途中に自由に立ち寄れるものなど、来館者の予定や意向に合わせて参加できるものとした。

実施回数 6回 参加人数 103人

OTOPボランティアによるオープンワークショップ 手作りアニメーション

当館特製の円盤型のキットを使って、19世紀に発明されたアニメーション装置「おどろき盤」を制作するプログラム。事前申込不要で、開催時間内に自由に参加してもらおうオープンワークショップとして実施した。大人ひとりから子ども連れのファミリーまで、さまざまな形での参加があった。参加者は、思い思いに、世界に一つだけのオリジナルアニメーションを制作した。

実施日時 2月11日(水・祝) 13:30-17:00

参加人数 43人



OTOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム

当館オリジナルの「色と形と言葉のゲーム」は、不思議な形のカラフルなカードと、さまざまな言葉が書かれたカードを使って、参加者が感じたことや思ったことを話し合い、それぞれの感じ方や考えの違いをそのまま楽しむゲーム。当日、自由に参加できるオープンワークショップとして実施した。偶然同じテーブルに座った参加者がゲームを一緒に体験し、互いの言葉を受け取るうちに、自然と打ち解けていく様子がしばしばみられた。会場がミュージアムショップや出品作品であるエキソニモ《Kiss, or Dual Monitors 2026》2026年(恵比寿映像祭ヴァージョン)の撮影ブースに隣接するスペースであったことから、多くの来場者の目にとまり、ワークショップやゲームへの関心を集めることができた。

実施日時 2月13日(金)、14日(土) 各日14:00-16:00

参加人数 29人

ダンス・ウェル

インクルーシブな作品鑑賞体験プログラムとして「ダンス・ウェル」を実施した。小学生から大人まで15名の参加者が、恵比寿映像祭2026のテーマを念頭に作品を鑑賞し、それぞれの鑑賞体験を、言

葉ではなくからだの動きで表現しあいながら、相互の鑑賞や感覚の共鳴やずれを楽しむ体験となった。

実施日時 2月15日(日) 14:00-15:30

参加人数 15人

講師 白神ももこ(振付家、演出家、ダンス・ウェル講師)

アシスタント 長澤あゆみ(ダンス・アーティスト、ダンス・ウェル講師)、北川 結(ダンサー、振付家、イラストレーター)

東京都歴史文化財団施設間連携事業(東京都美術館、東京都渋谷公園通りギャラリー)



〇地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム「恵比寿映像祭でじっくりみてみよう!」

美術館から徒歩4分ほどの場所にある景丘の家との連携プログラム。小学1年生から3年生の参加者9人が3グループに分かれ、出品作品に関するクイズを記したワークシートをたよりに展示室内を探検しながら作品を鑑賞した。その後景丘の家へ移動し、地域連携プログラムの展示を出品作家の東野翠れん氏のミニレクチャーと共に鑑賞した。

実施日時 2月21日(土) 13:30-16:00

参加人数 9人

〇筆談鑑賞会 手話通訳付 インクルーシブワークショップ

聞こえない人、聞こえにくい人、聞こえる人が筆談をしながら一緒に作品鑑賞を楽しむプログラム。「耳の聞こえない鑑賞案内人」と共に、筆談での対話で、文字や絵でイメージと言葉を共有し、案内人が中心となってそれぞれのイメージや言葉に関連づけながら、作品鑑賞を深めていった。それによって、参加者は見ているようで見えていなかったことへの気づきなどを得た。

実施日時 2月22日(日) 14:00-16:30

参加人数 7人

講師 小笠原新也

令和7年度 パブリックプログラム（恵比寿映像祭2026）実績

開催日	プログラム名	講師など	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	対象など
1 2月11日（水・祝）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 手作りアニメーション	当館ボランティアスタッフ	43	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも
2 2月13日（金）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	10	無料	当館2階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
3 2月14日（土）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	19	無料	当館2階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
4 2月15日（日）	ダンス・ウェル（東京都歴史文化財団施設間連携事業）	講師：白神もこ アシスタント：長澤あゆみ、北川結	15	無料	当館スタジオ、展示室	恵比寿映像祭2026の鑑賞体験に基づくダンス・プログラム	どなたでも/手話通訳付
5 2月21日（土）	地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム「恵比寿映像祭でじっくりみてみよう！」	教育普及プログラムスタッフ、東野翠れん	9	無料	当館スタジオ、展示室、景丘の家	当館と景丘の家を探検しながら、それぞれの展示作品を鑑賞	小学生
6 2月22日（日）	筆談鑑賞会 手話通訳付 インクルーシブワークショップ	小笠原新也、社会包摂プログラム・スタッフ	7	無料	当館スタジオ、展示室	筆談による出品作品鑑賞	小学4年生以上どなたでも/手話通訳付
合計6回			103人				

教材開発

教育普及プログラムを実施するなかで生まれた発想をもとに開発した、鑑賞を深める手助けと同時に、多様性の理解や社会課題の解決に繋がるオリジナル教材を活用し、当館独自の取り組みを行った。

【教材開発】

対話による鑑賞を促進するための教材と、アニメーション制作の教材を開発し、活用の促進を行った。

「色と形と言葉のゲーム」

対話型作品鑑賞を行う前のウォーミングアップ教材として制作。同じ言葉や同じ形を見ても人それぞれ感じ方が異なることを楽しく理解することができる。

令和7年度は、スクールプログラム、パブリックプログラムのほか、ビジネスパーソン対象型鑑賞会などでも活用した。

内容物：

- ① 色と形のカード 12色、21種類
- ② 言葉のカード 80種類
- ③ あそびかたガイド 1冊

価格4,565円

令和7年度 販売数 166個



「回転アニメーションWebアプリ マジカループ」

教育普及プログラムでは令和3年度にアニメーションを楽しく学ぶためのデジタル教材「回転アニメーションWebアプリ マジカループ」を開発した。本アプリは、当初より学校の授業での活用を主目的として開発しており、本アプリを使用することで、アニメーション制作の授業を地域格差なく行うことができる。

令和7年度「マジカループ」活用実績利用者数 86,857人

平均エンゲージメント時間 9分25秒（令和7年4月1日～令和8年3月31日現在）

※Googleアナリティクスによる分析



東京都写真美術館 教育普及ボランティア

ボランティアが主体的に活動を行うオープンワークショップとして、定番の「手作りアニメーション体験」や「色と形と言葉のゲーム」に、新たに「暗室での現像体験」が加わり、幅広い体験プログラムのサポートを行った。

今年度はボランティアの育成に注力し、暗室・スタジオを開放した自主研修会の回数を大幅に増やしたほか、モノクロ銀塩プリントやフォトグラム、また、オープンワークショップに関わるおどろき盤やマジカループ、デジタルネガの現像といった制作プログラム等についてフォローアップを行う「ワークショップ研修」を実施し、改めてサポートのポイントを振り返り、習得してもらう機会を設けた。バリアフリー研修としては、ろうユニット「ミナテマリ」や盲ろう者の森敦史氏によるレクチャー等により、多様な背景やそれぞれの障害特性、また、それに合わせた障害のある人へのサポートのポイント等について研修を提供した。多様な研修を設けることで、ボランティアが互いにスキルを高め合う機会の創出を目指した。

令和7年度も新規ボランティアの募集を行い、11月より新たなボランティアメンバーが加わった。ボランティア全員が各プログラムで円滑かつ自主的に活動できるよう、制作プログラムや社会包摂に関する基礎研修を行った。

さまざまなプログラムでの活動と多様な研修を資源として、恵比寿映像祭2026では、オープンワークショップを実施し、恵比寿映像祭教育普及プログラムとしてボランティアが主体となって運営したほか、昨年同様、視覚や聴覚から情報を得にくい方、車いすを利用している方など、手助けが必要な方と一緒に展示会場をめぐる鑑賞サポート等の活動も行った。

1 登録者数

令和6年度からの更新登録者：76名（活動休止者3名：数に含まず）
新規登録者：11名

2 ボランティア活動実績

活用事業実施回数 110回

1ヶ月平均 9.17回

のべ 397人

（ただしボランティア研修会をのぞく）

年間一人あたり 4.56回

- (1) パブリックプログラムでの活動 18回
- (2) スクールプログラムでの活動 16回
- (3) アクセシビリティ向上プログラムでの活動 14回
- (4) 恵比寿映像祭での活動 62回

3 研修会・連絡会

- (1) ボランティア研修会 19回（うち自主研修会 7回）
のべ参加者数 118人
令和7年5月11日（日）ボランティア自主研修会①（スタジオ・暗室開放）
令和7年7月5日（土）ワークショップ研修①（暗室での現像体

験オープンワークショップのフォローアップ）講師：当館スタッフ

令和7年7月5日（土）ボランティア自主研修会②（スタジオ・暗室開放）

令和7年7月27日（日）バリアフリー研修①（ろう文化に触れる・体験する）講師：ろうユニット「ミナテマリ」（mina te mari）

令和7年8月30日（土）ワークショップ研修②（暗室サポートのフォローアップ：モノクロ銀塩プリント）講師：当館スタッフ

令和7年8月30日（土）ボランティア自主研修会③（スタジオ・暗室開放）

令和7年9月20日（土）バリアフリー研修②（鑑賞サポートのフォローアップ）講師：当館スタッフ

令和7年9月20日（土）ボランティア自主研修会④（スタジオ・暗室開放）

令和7年10月16日（木）新規ボランティア研修①（暗室プログラム）Aチーム 講師：当館スタッフ

令和7年10月18日（土）新規ボランティア研修①（暗室プログラム）Bチーム 講師：当館スタッフ

令和7年10月26日（日）新規ボランティア研修②（社会包摂／手作りアニメーション／ガイダンス）講師：当館スタッフ

令和7年11月1日（土）ボランティア自主研修会⑤（スタジオ・暗室開放）

令和7年12月7日（日）ワークショップ研修③（暗室サポートのフォローアップ：フォトグラム）講師：当館スタッフ

令和7年12月7日（日）ボランティア自主研修会⑥（スタジオ・暗室開放）

令和7年12月12日（金）バリアフリー研修③（盲ろうの世界を知る）講師：森敦史（筑波技術大学・研究員）

令和8年1月10日（土）ボランティア自主研修会⑦（スタジオ・暗室開放）

令和8年2月1日（日）ワークショップ研修④（おどろき盤、マジカループのフォローアップ）講師：当館スタッフ

令和8年2月1日（日）ボランティアワークショップ研修⑤（「色と形と言葉のゲーム」ファシリテーションのフォローアップ）講師：当館スタッフ

令和8年2月8日（日）バリアフリー研修④（オール・ウェルカム・デー（TOPボランティアによる鑑賞サポート）事前研修）講師：当館スタッフ

- (2) ボランティア連絡会 3回 のべ参加者数 81人
令和7年5月11日（日）、11月1日（土）、令和8年3月8日（日）



講演会等

【収蔵展・自主企画展】

展覧会・事業名	部門	テーマ	開催日	講師・出演等	参加人数
総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババー この日常を生きのびる ためにー	出品作家とゲストによる対談		4月5日(土)	鷹野隆大(本展出品作家)×北川一成(デザイナー、GRAPH代表取締役)	77
			5月3日(土)	鷹野隆大(本展出品作家)×丹尾安典(雑本雑学者、早稲田大学名誉教授)	94
			5月24日(土)	鷹野隆大(本展出品作家)×倉石信乃(詩人、批評家、明治大学教授)	128
総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行	連続対談 過去と未来をつなぐ	第1回「つなぐ眼差し：私と5人の作家たち」	5月30日(金)	鈴木麻弓(日本大学芸術学部写真学科 准教授)、石田哲朗(当館学芸員)	34
		第2回「コレクションー集め、掘り出し、見せること」	6月13日(金)	古田亮(東京藝術大学大学美術館 教授)、佐藤真実子(当館学芸員)	30
総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景	シンポジウム		7月5日(土)	アデーレ・ギッリ(ルイジ・ギッリ財団代表)、イラリア・カンピオーリ(レージョ・エミリア市立博物館写真部門キュレーター)	161
	ドキュメンタリー映画 『Infinito』上映とゲストによるアフタートーク		7月18日(金)	イラリア・カンピオーリ(レージョ・エミリア市立博物館写真部門キュレーター)	155
			8月24日(日)	岡田温司(京都大学名誉教授)	190
			9月12日(日)	森岡督行(森岡書店代表)	190
総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル展	スペシャルトーク		7月6日(日)	Shirley den Hartog (Studio Erwin Olafディレクター)	36
	連続対談 過去と未来をつなぐ		7月25日(金)	石原友明(出品作家、京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員)、遠藤みゆき(当館学芸員)	29
	連続対談 過去と未来をつなぐ	私たちが踊っているときに行っていること	9月19日(金)	野澤豊一(富山大学人文科学系 准教授)、山崎香穂(当館学芸員)	28
総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ	アーティストトーク		8月28日(木)	ペドロ・コスタ(本展出品作家)	175
	出品作家とゲストによる対談		8月29日(金)	ペドロ・コスタ(本展出品作家)、長島有里枝(写真家)	162
	出品作家とゲストによる対談		8月30日(土)	ペドロ・コスタ(本展出品作家)、諏訪敦彦(映画監督、東京藝術大学教授)	190
	出品作家による上映アフタートーク		8月31日(日)	ペドロ・コスタ(本展出品作家)	190
	ゲストによる上映アフタートーク		11月28日(金)	アンディ・レクター(映画評論家、プログラマー)	49
			12月5日(金)	松田美緒(歌手)	77
			12月6日(土)	北小路隆志(映画評論家、京都芸術大学教授)	139
	出品作家による上映アフタートーク		12月7日(日)	ペドロ・コスタ(録画)(出品作家)	158
総合開館30周年記念 遠い恋へ 日本の新進作家 vol. 22	出品作家とゲストによるトーク		10月19日(日)	スクリプカリウ落合安奈(出品作家)×岡ともみ(出品作家)×竹内万里子(批評家・作家、京都芸術大学教授)	65
	出品作家 甫木元空による上映+アフタートーク		10月26日(日)	甫木元空(出品作家)	169
	出品作家 甫木元空による上映 ※作家による生演奏付き上映		12月13日(土)	甫木元空(出品作家)	190
	出品作家とゲストによるトーク		12月27日(土)	寺田健人(出品作家)、呉夏枝(出品作家)、鷲田めろろ(金沢21世紀美術館館長、東京芸術大学准教授)	91
総合開館30周年記念 トークセッション写真映像とこれからの30年	ロクサーナ・マルコチ氏 スペシャルトーク		10月9日(木)	ロクサーナ・マルコチ Roxana Marcoci (ニューヨーク近代美術館キュレーター)、モデレーター：丹羽晴美(当館学芸員)	70
	「恵比寿映像祭と変わりゆく映像体験」		10月17日(金)	岡村恵子(東京都現代美術館学芸員)、モデレーター：田坂博子(当館学芸員)	30
	「アジアからの視点：写真史を複数化し再構成する」		10月18日(土)	陳佳琦(写真史家)、呉詩滢(ナショナル・ギャラリー・シンガポールキュレーター)、モデレーター：遠藤みゆき(当館学芸員)	29
	「写真を満喫するメソッド～技術と歴史～」		10月25日(土)	高橋則英(日本写真芸術学会会長)、鳥海早喜(日本大学芸術学部准教授)、モデレーター：三井圭司(当館学芸員)	73
	「公立美術館における写真表現の可能性」		11月1日(土)	笠原美智子(長野県立美術館館長)、モデレーター：丹羽晴美(当館学芸員)	69
		「美術館のコレクション・ケア：レジストラと美術輸送の視点から見るコレクションの現在とこれから」	11月2日(日)	小川絢子(国立国際美術館主任研究員レジストラ)、寛奈雅子(国立西洋美術館主任研究員)、相澤邦彦(ヤマト運輸(美術)スペシャルアドバイザー/コンサヴァター)、モデレーター：堀田文(当館レジストラ)	83
総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから	出品作家による映像作品の上映+アフタートーク		1月10日(土)	金村修(出品作家)、倉石信乃(明治大学教授、近現代美術史・写真史)	77
	アーティスト・トーク		1月11日(日)	志賀理江子(出品作家)	190
恵比寿映像祭2026	アーティスト・トーク		2月6日(金)	アンジェリカ・メシエ(出品作家)	20
	パフォーマンス+トーク	《敬啓者》(拝啓)	2月6日(金)	ゴツプロ!×劇場 共同制作	50
	ワークショップ	針と糸と料理で紡ぐー原住民文化の体験ワークショップ	2月7日(土)	張恩満(出品作家)	14
	パフォーマンス+トーク	《敬啓者》(拝啓)	2月7日(土)	ゴツプロ!×劇場 共同制作	50
	上映+トーク	チョン・ソジョン特集〈Overtoneー潜む音の層〉Q&A	2月7日(土)	チョン・ソジョン(出品作家)	33
	パフォーマンス	《Waterbowls》	2月7日(土)	トモコ・ソヴァージュ(出品作家)	50
	アーティスト・トーク:		2月8日(日)	キュンチョメ(出品作家)	32
	シンポジウム	映画・映像における多声的な言語	2月8日(日)	キャメロン・L・ホワイト(アジア言語・文化研究者、ミンガン大学博士課程在籍)、メー・アーダードン・インカワニット(映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授)、三澤真美恵(華語映画研究者、日本大学文学部 中国語中国文学科 教授)	38

展覧会・事業名	部門	テーマ	開催日	講師・出演等	参加人数	
恵比寿映像祭2026	上映+トーク	モーガン・クウェインタンス特集：発話行為&イメージの合唱 Q&A	2月8日(日)	モーガン・クウェインタンス(出品作家)	31	
	パフォーマンス	《Waterbowls》	2月10日(火)	トモコ・ソヴァージュ(出品作家)	50	
	ワークショップ	見える人、見えない人、見えづらい人が集まり、言葉で見る写真鑑賞ツアー	2月11日(水・祝)、 2月22日(日)	鶴巻育子(出品作家)、難波創太	16	
	教育普及プログラム	オープンワークショップ 手作りアニメーション	2月11日(水・祝)	TOPボランティア	43	
	シンポジウム	映像表現の現在地とこれから—第3回コミッション・プロジェクトに向けて	2月11日(水・祝)	[パネリスト] 沖啓介(メディア・アーティスト) 斉藤綾子(映画研究者、明治学院大学教授) レオナルド・バルトロメウス(山口情報芸術センター[YCAM]、Gudskul Ekosistemキュレーター) メー・アーダードン・インカワニット(映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授) 田坂博子(恵比寿映像祭2026キュレーター/東京都写真美術館学芸員) [進行] 恵比寿映像祭2026事務局(エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社)	34	
	上映+トーク	モーガン・クウェインタンス特集：発話行為&イメージの合唱 Q&A	2月11日(水・祝)	モーガン・クウェインタンス(出品作家)	61	
	アーティスト・トーク		2月12日(木)	鶴巻育子(出品作家)	24	
	教育普及プログラム	オープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	2月13日(金)、2月 14日(土)	TOPボランティア	29	
	上映+トーク	《エクスネ・ケディの白日夢》+幽体離脱ライブ	2月13日(金)	井手健介&南木元空(出品作家) 樋口泰人(ゲスト)	188	
	上映+トーク	佐藤真《阿賀に生きる》Q&A	2月14日(土)	旗野秀人(《阿賀に生きる》発起人)	107	
	上映+トーク	佐藤真《阿賀の記憶》Q&A	2月14日(土)	小林茂(映画監督)	100	
	上映+トーク	小森はるか《春、阿賀の岸辺にて》	2月14日(土)	小森はるか(出品作家)	111	
	シンポジウム	受け継がれるデジタルの声—マイグレーション、エミュレーター、そしてエコー	2月15日(日)	[パネリスト] マイケル・コナー(Rhizomeエグゼクティブ・ディレクター) 赤岩やえ[エキソニモ](出品作家) 千房けん輔[エキソニモ](出品作家)*千房氏のみNYよりオンライン参加 モデレーター：田坂博子(恵比寿映像祭2026キュレーター/東京都写真美術館学芸員)	89	
	教育普及プログラム	ダンス・ウェル	2月15日(日)	講師：白神ももこ(振付家、演出家、「モモンガ・コンプレックス」主宰、ダンス・ウェル講師) アシスタント：長澤あゆみ(ダンス・アーティスト、「いまここダンス」共同主宰、ダンス・ウェル講師)、北川 結(ダンサー、振付家、イラストレーター)	15	
	シンポジウム	[日仏会館共催企画] あるがままの音へ	2月18日(水)	[パネリスト] トモコ・ソヴァージュ(出品作家)※オンライン参加 東岳志(サウンドエンジニア、山食音 代表) 柳沢英輔(首文化研究者) [司会/モデレーター] 川出良枝(放送大学教授、日仏会館 学術・文化事業委員会委員) 山崎香穂(恵比寿映像祭2026キュレーター/東京都写真美術館学芸員)	34	
	アーティスト・トーク		2月20(金)	原直久(出品作家、日本大学名誉教授)、高橋剛英(日本写真芸術学会会長)、三井圭司(恵比寿映像祭2026キュレーター/東京都写真美術館学芸員)	60	
	パフォーマンス		2月20(金)	冥丁(出品作家)	172	
	上映+トーク	山本薩夫《戦争と人間 完結編》Q&A	2月21(土)	とちぎあきら(フィルムアーキビスト)	26	
	教育普及プログラム	景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム「恵比寿映像祭でじっくりみてみよう!」	2月21(土)	東野翠れん(地域連携プログラム出品作家)	9	
	上映+トーク	大木裕之《meta dramatic 劇的》+《ウム/オム1》ほか	2月21(土)	前田真二郎(映像作家)、西村友巳(アーティスト)	177	
	教育普及プログラム	筆談鑑賞会 手話通訳付き インクルーシブワークショップ	2月22日(日)	小笠原新也(耳の聞こえない鑑賞案内人)	7	
	上映+トーク	河合健《みんな、おしゃべり!》Q&A	2月22日(日)	河合健(出品作家)、牧原依里(映画作家)、ワカス・チョーラク(クルド表現監修)	135	
	上映+トーク	音の風景：小杉武久とタージ・マハル旅行団の映像と音楽 対談	2月23日(月・祝)	ふじいせいいち(出品作家)、湯浅学(音楽評論家/司会)	174	
	W.ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代	シンポジウム	「W. ユージン・スミスと音楽」	3月15日(土)	アイリーン・美緒子・スミス(アイリーン・アーカイブ)、ケヴィン・ユージン・スミス(W. ユージン・スミス・エステート マネージャー)	109
	参加人数合計 5,516人					

【誘致展】

展覧会・事業名	部門	テーマ	開催日	講師・出演等	参加人数
ロバート・キャバ戦争	ゲストによるトーク		4月26日(土)	宮嶋茂樹(報道写真家) 聞き手：白山真理(写真評論家)	190
被爆80年企画展 ヒロシマ1945	主催担当者とゲストによるトーク	「母は被爆少女だった」	6月28日(土)	宇城昇(毎日新聞社広島支店専門記者)×藤井哲伸(国平幸男氏撮影「被爆後の市街地に立つ少女」藤井幸子さん長男)	144
		「原爆 そして倉庫で密かに保管された日映フィルム」	6月29日(日)	小林康秀(中国放送報道制作局)×山内隆治(日映映像東京支社長)	116
		「被爆直後の広島 フィルムから読み解く写真記者の視線」	7月4日(金)	清水隆(元朝日新聞社フォトアーカイブ編集部)×吉田耕一郎(朝日新聞社映像報道部)	93
		「広島原爆記録写真の撮影者 証言からたどる」	7月10日(木)	水川恭輔(中国新聞社編集委員)	75
		「埋もれていた同盟通信の原爆写真 謎に迫る」	8月8日(金)	沼田清(共同通信社元写真調査部長)	73
	ゲストによるトーク	ヒロシマを聴き合う—哲学者・永井玲衣さんとともに	7月23日(水)	永井玲衣(哲学者)	24
参加人数合計 715人					

ギャラリートーク

【収蔵展・自主企画展】

展覧会会期中には、出品作家や担当学芸員による展示解説を行った。

展覧会	開催日	講師等	参加人数
総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ ーこの日常を生きの びるためにー	令和7年4月4日(金)、5月2日(金)	遠藤みゆき	43
総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行	令和7年4月11日(金)、4月25日(金)、5月23日 (金)、6月20日(金)	佐藤真実子、大崎千野、室井萌々、山崎香穂、石田哲朗	198
総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景	令和7年7月11日(金)、8月1日(金)、9月5日 (金)	山田裕理	211
総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル	令和7年7月18日(金)、8月8日(金)、9月5日 (金)	遠藤みゆき、山崎香穂、邱于瑄、石田哲朗	132
総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ	令和7年8月29日(金)、10月17日(金)、11月 28日(金)	田坂博子	56
総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22	令和7年10月10日(金)、11月21日(金)、12月 19日(金)、令和8年1月3日(土)	大崎千野	175
総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから	令和7年10月20日(金)、11月14日(金)、12月 5日(金)、令和8年1月2日(金)、1月9日	伊藤貴弘	216
恵比寿映像祭2026 コミッション・プロジェクト&東京都コレク ション	令和8年3月6日(金)、3月13日(金)、3月14日 (土)	三井圭司、3月14日ゲスト：小森はるか(出品作家)	43
W.ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代	令和8年3月20日(金)	室井萌々	79
参加人数合計 513人			

【誘致展】

外部企画・資金を導入した誘致展においても、出品作家などによる展示解説を行った。

展覧会	開催日	講師等	参加人数
被爆80年企画展 ヒロシマ1945	令和7年7月17日(木)、7月31日(木)	報道各社の担当(中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、中 国放送(RCC)、共同通信社、日本放送協会(NHK))	177
参加人数合計 177人			

社会共生の取り組み

当館では、乳幼児から高齢者まで、障害のある人もない人も、海外にルーツをもつ人たちも、あらゆる人が写真や映像作品を通して芸術文化を楽しむ共生社会の実現に向けて、段階的にアクセシビリティ向上に取り組んできた。今年度は、障害当事者やサポートを必要とする人々と協働した企画や検証、環境整備に特に力を入れた。

鑑賞に至るまで～人々が芸術文化の鑑賞・参加に至るまでの環境整備

公式ウェブサイトのアクセシビリティ向上

・読み上げ対応や表示調整機能の追加など

財団の基準に基づき、さまざまなユーザーや使用環境に配慮した改修を昨年度に続き行った。

・『ことばの案内』追加

視覚障害当事者の協力を得て、恵比寿駅から当館までの往復ルートを説明する「ことばの案内」を制作し、アクセスページに掲載した。フロアマップなどの画像やPDFにも「ことばの案内」を追加して公開し、スクリーンリーダーで利用しやすいよう調整した。



・ウェブアクセシビリティ診断

日本産業規格JIS X 8341-3:2016に基づいた試験を実施し、結果をウェブサイトに掲載した。

多様な来館者を想定した受付対応

・手話および多言語対応

1階総合受付に金・土・日曜日と祝日に手話対応スタッフを配置し、遠隔手話サービスも併用して常時手話対応を可能にした。英語、中国語、韓国語対応スタッフを引き続き配置したほか、音声認識アプリ、指差しコミュニケーションシートを活用した。

・「サポート・スタッフ」の配置

障害等で配慮の必要な方への一次対応を行うことで、多様な来館者への受付対応を充実させた。

・センサーキットの貸出

感覚過敏などへの配慮として、イヤーマフ・遮光眼鏡・フィジエットイを受付で貸し出し、来館者が安心して館内を利用できる環境を整えた。



・子ども向けマナー案内カード

低年齢の来館者向けに、美術館でのマナーを伝える案内カードを日英二言語で制作した。音声コード (Uni-Voice) と、その位置を触察できる切り欠き加工を採用し、視覚障害のある来館者もアクセスしやすい仕様とした。



アクセシビリティ対応のできる担い手の育成

・アクセシビリティ向上研修 [全3回] (職員対象)

多様な来館者への理解と適切な対応に向けた知識と視点を深めた。

① 文化施設とやさしい日本語研修

日時：令和7年6月17日 (火)

講師：村田陽次 (東京都 都民安全総合対策本部)

参加者：25人 (職員および館内委託業者)



② 災害時の要支援者の避難誘導研修

日時：令和7年11月17日（月）

ファシリテーター：田村太郎（一般財団法人ダイバーシティ研究所）

協力：公益財団法人目黒区国際交流協会、社会福祉法人聴力障害者情報文化センター

参加者：19人

協力者：10人（ろう者、中途失聴・難聴者、盲ろう者、外国人）



③ 盲ろうの世界を知る研修

日時：令和7年12月12日（金）

講師：森敦史（国立大学法人筑波技術大学 研究員）

参加者：20人（職員およびボランティア）



・バリアフリー研修（ボランティア対象）

さまざまな発達障害の特性と対処法について学ぶ「ろう文化に触れる・体験する」「盲ろうの世界を知る」を実施。（ボランティアについてはp.34）

鑑賞のために～展覧会の鑑賞体験やプログラムの参加体験を豊かにするための環境整備

イベントの情報保障（手話通訳、文字通訳）

・手話通訳付きギャラリートーク

学芸員が展覧会の見どころをわかりやすく解説するギャラリートークに、情報保障として手話通訳をつけた。

実施回数：15回

手話を必要とするのべ参加者数：22人

手話通訳：瀬戸口裕子、山崎薫、長谷川美紀



・文字表示支援付きギャラリートーク

実施回数：1回



撮影：いしかわみちこ

・トークイベント

文字通訳：計2回

手話通訳または文字通訳、あるいは両方：計9回



恵比寿映像祭2026 シンポジウムより 撮影：新井孝明

手話による展覧会解説動画

手話を第一言語とする来館者への情報保障として、展覧会各エリアの概要を手話で解説する動画を制作し、会場に掲示した。来館者は二次元コードから動画を視聴しながら鑑賞できるようにした。当館ウェブサイトでもアーカイブを閲覧しやすいよう整備した。

制作本数：計6本

出演：小園江聡

手話翻訳・通訳：瀬戸口裕子、山崎薫

撮影・編集：藤澤卓也



「オール・ウェルカム・デー」TOPボランティアによる鑑賞サポート

より多様な来館者が安心して鑑賞できる環境づくりを目的に実施した。タブレット操作補助、補聴支援デバイスの貸出、筆談対応、遮光眼鏡やイヤーマフの貸出、カームダウンスペースの案内など、来館者の個々のニーズに応じた支援を行った。

実施回数：10回

のべ利用者数：21人



触知図の貸出、配布および鑑賞サポート

視覚に障害のある来館者に向けて、約10年ぶりに館内フロアマップの触知図をリニューアル制作し、凹凸印刷と点字を用いた新仕様で貸出・配布を行った。また、各展覧会では移動補助として展示室の間取りの触知図を提供するとともに、作品の特徴を凹凸で示した作品触知図を用意し、作品理解を補助した。



収蔵作品 マリオ・ジャコメリ《自分の顔を撫でる手もない》の触知図

やさしい見どころガイド

展覧会の見どころを簡単な日本語と作品図版で紹介したガイドを計3回制作し、展示室での配布とウェブサイトでの掲載を行った。一部のガイドには、音声コードUni-Voice（ユニボイス）も掲載した。さらに、点字版も制作して冊子として貸出を行い、視覚に障害のある来館者の鑑賞を支援した。

TOPコレクション トランスフィジカル

遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22

恵比寿映像祭2026



音声コードUni-Voice（ユニボイス）の活用

展覧会の概要や展示室内の各エリアの解説を音声で読み上げる音声コードを配布した。

TOPコレクション 不易流行（解説パネルに貼付）

TOPコレクション トランスフィジカル（解説パネルに貼付）

遠い窓へ 日本の新進作家vol.21（「やさしい見どころガイド」に掲載）

恵比寿映像祭2026（各フロアで配布）

障害当事者団体の受け入れ

医療療育施設利用者グループの来館に際し、事前のヒアリングから当日のアテンドまでの対応を行った。特別支援学校の受け入れも行った。（「スクールプログラム」についてはp.24）

映画のバリアフリー上映

計8本のバリアフリー字幕版や多言語版、音声ガイド機能を含む

UDCast対応作品の上映を行った。(「上映事業」についてはp.72)

参画のために～障害当事者やサポートを必要とする人々の参画を拡げるための環境整備

当事者をつくる災害時の避難誘導の手引き

職員研修の協力者である視覚・聴覚障害の当事者や、日本語が第一言語ではない当事者と共に検討会を行い、災害時にコミュニケーション上の配慮が必要な来館者に対応するための手引きを作成した。



インクルーシブ撮影ワークショップ「五感を使ってポートレート制作」

視覚障害の当事者でもある美術家の塩崎由美子氏と共に企画・運営を行った。友人や家族と2人1組で「撮る」「撮られる」を交互に体験し、五感を使ってその人らしさを捉えるポートレートを制作した。

日時：令和7年11月23日(日)

講師：塩崎由美子(写真家・美術家)

参加者数：8人



インクルーシブワークショップ「筆談鑑賞会」(手話通訳付き)

「耳の聞こえない鑑賞案内人」小笠原新也氏をナビゲータに迎え、聞こえない人、聞こえにくい人、聞こえる人が筆談をしながら一緒に作品鑑賞を楽しんだ。申込時の要望に応じて文字通訳も付けた。

日時：令和7年11月8日(土)

対象の展覧会：「遠い窓へ 日本の新進作家vol. 22」

講師：小笠原新也(耳の聞こえない鑑賞案内人)

参加者数：10人

※恵比寿映像祭2026でも実施。(「恵比寿映像祭」についてはp.14、68)



Antenna付 展覧会のギャラリートーク(手話通訳付き)

学芸員による展覧会の解説に加え、作品から発せられる音をウェアラブルデバイス“Antenna”を使って振動や光に変換しながら鑑賞し、多様な来館者が参加しやすい鑑賞環境を提供した。

日時：令和7年12月19日(金)

対象の展覧会：「遠い窓へ 日本の新進作家vol. 22」

進行：大崎千野(本展担当学芸員)

参加者数：4人

(展覧会についてはp.18)



岡ともみ(サカサゴト)より 展示風景 撮影：いしかわみちこ

インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」

(「パブリックプログラム」についてはp.27)

情報保障付き 展覧会関連イベント

	展覧会名	イベント	情報保障の種類	実施日	手話を必要とする参加人数
1	総合開館30周年記念 「鷹野隆大 カスババ この日常を生きのびるために」	ギャラリートーク	手話通訳	4月4日(金)、5月2日(金)	2
2	総合開館30周年記念「TOPコレクション 不易流行」	ギャラリートーク	手話通訳	5月23日(金)、6月20日(金)	4
3	総合開館30周年記念「レイジ・ギッリ 終わらない風景」	ギャラリートーク	手話通訳	8月1日(金)、9月5日(金)	6
4	総合開館30周年記念「TOPコレクション トランスフィジカル」	ギャラリートーク	手話通訳	8月8日(金)、9月12日(金)	2
5	総合開館30周年記念「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」	ギャラリートーク	手話通訳	10月17日(金)、11月28日(金)	2
6	総合開館30周年記念「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」	ギャラリートーク	手話通訳	11月21日(金)、12月19日(金)	2
7	総合開館30周年記念「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」	トークイベント	文字表示支援	10月19日(金)、12月27日(金)	
8	総合開館30周年記念「作家の現在 これまでとこれから」	ギャラリートーク	手話通訳	11月14日(金)、12月5日(金)、 1月9日(金)	4
9	恵比寿映像祭2026 あなたの音に Polyphonic Voices Bathed in Sunlight 一日花聲音—	特別鑑賞会レセプション	文字表示支援	2月5日(木)	
10	恵比寿映像祭2026 あなたの音に Polyphonic Voices Bathed in Sunlight 一日花聲音—	シンポジウム、 トークイベント	手話通訳、文字表示支援	2月8日(日)、2月11日(水祝)、 2月12日(木)、2月15日(日)、 2月22日(日)	
11	恵比寿映像祭2026 あなたの音に Polyphonic Voices Bathed in Sunlight 一日花聲音—	トークイベント	文字表示支援	2月8日(日)、2月20日(金)	
12	「W.ユージン・スミス ロフトの時代」	ギャラリートーク	文字表示支援	3月20日(金)	

手話による展覧会解説動画

	展覧会名	配信開始日
1	総合開館30周年記念「TOPコレクション 不易流行」	5月15日
2	総合開館30周年記念「TOPコレクション トランスフィジカル」	7月23日
3	総合開館30周年記念「レイジ・ギッリ 終わらない風景」	8月13日
4	総合開館30周年記念「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」	10月3日
5	総合開館30周年記念「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」	11月7日
6	総合開館30周年記念「作家の現在 これまでとこれから」	11月19日

収集の基本方針

平成元(1989)年2月3日(昭和63年度)策定

写真作品(オリジナル・プリント)を中心に、写真文化を理解する上で必要なものを、幅広く収集する。

[写真作品]

- 1.国際的な視野に立って、国内外の芸術性、文化性の高い作品を幅広く収集する。
- 2.写真の発生から現代まで、写真史のうえで重要な国内外の作家・作品を幅広く、体系的に収集する。
- 3.歴史的に評価の定まった作品を重視するとともに、各種の展覧会等で高い評価を受けた作家・作品発掘に努め、現代から未来を展望した収集を行う。
- 4.東京を表現、記録した国内外の写真作品を収集する。
- 5.日本の代表的作家については重点的に収集し、その作家の創作活動の全体像を表現し得る点数を収集する。
- 6.基本方針「写真作品」5.に基づき作品を収集した第一期重点収集作家(17名、五十音順)秋山庄太郎、石元泰博、植田正治、川田喜久治、木村伊兵衛、桑原甲子雄、白川義員、土田ヒロミ、東松照明、長野重一、奈良原一高、濱谷浩、林忠彦、藤原新也、細江英公、森山大道、渡辺義雄

[写真資料]

- 1.出版物(写真集、専門書、雑誌)については、写真文化に関するものを歴史的、系統的に収集する。
- 2.ネガフィルムの類については、作家・作品研究などに必要と考えられるものを収集する。
- 3.ポスターなど、写真展の付属資料(図録、チケット等)を収集する。
- 4.その他、作家や作品の関連資料、周辺資料を適宜収集する。

[写真機材類]

- 1.写真の原理と発掘の歴史、ソフトとハードの接点を理解させる展示に必要なものを収集する。
- 2.体験学習などの事業活動に必要となるものを収集する。

[映像資料]

- 1.映像文化史を展示するのに必要な映像資料を系統的に収集する。
- 2.体験型の展示を行うため、映像装置などのレプリカや模型を計画的に製作する。
- 3.日本およびアジアの映像文化史についての調査研究を進め、重要な映像資料を収集する。
- 4.各映像ジャンルの代表的な映像資料および芸術価値の高い作品を収集する。

[作品収集の目標]

- 1.長期収集計画 7万5千点以上
内訳:写真作品(国内・海外50,000点以上、写真作品以外の資料25,000点以上)

写真作品収集の指針 平成18(2006)年11月13日策定

- 1.写真作品収集の基本方針に則り、写真美術館コレクションをより充実させる。
- 2.黎明期の写真のように、希少的価値のある作品を積極的に収集する。
- 3.写真史において重要な役割を果たした歴史的作家の作品を体系的に収集する。
- 4.1980年代以降に評価の定まった作家作品を充実させる。
- 5.日本の新進作家展で取り上げた作家や国内外の主要な賞を受賞した作家、国内外の主要美術館における主要展覧会において取り上げられた作家など、若手作家の作品を収集する。
- 6.写真美術館の展覧会(自主展、収蔵展)で取り上げた作家作品を収集する。
- 7.基本方針「写真作品」5.に基づく新規重点作家の設定
 - (1) 日本を代表する作家であること
 - (2) 国内外で評価が高いこと
 - (3) 日本の写真の一分野を代表する作家であること
 - (4) 国内外の主要美術館で作品が収集され個展が開催されていること
 - (5) 現在おおよそ40代、50代、60代の作家を目安にする
 - (6) 収集にあたっては、現在の収集予算および市場価格の高騰を鑑み、購入及び寄贈により約200点の収蔵を目指す
 - (7) 重点作家については、国内外の写真・美術の動向を鑑み随時見直しをする
- 8.写真作品収集の新指針7に基づく第二期重点収集作家(21人、五十音順)荒木経惟、石内都、オノデラユキ、北井一夫、北島敬三、小山穂太郎、佐藤時啓、篠山紀信、柴田敏雄、杉本博司、鈴木清、須田一政、高梨豊、田村彰英、畠山直哉、深瀬昌久、古屋誠一、宮本隆司、森村泰昌、やなぎみわ、山崎博
- 9.写真作品収集の新指針7に基づく第三期重点収集作家(14人、五十音順)、平成30(2018)年11月21日策定
江成常夫、尾仲浩二、金村修、川内倫子、鬼海弘雄、鈴木理策、瀬戸正人、鷹野隆大、長島有里枝、ホンマタカシ、松江泰治、宮崎学、本橋成一、米田知子

令和7年度 東京都写真美術館 作品資料収集方針

I 東京都購入

1 購入作家及び点数

13作家 98点

2 考え方

東京都写真美術館「収集の基本方針」に基づき策定した「令和7年度東京都写真美術館における収蔵品購入に関する方針」（以下、「方針」）に基づき、以下の作品収集を行う（方針1は全収集作品に係る）。

(1) 写真・映像史の上で重要な国内外の作家・作品を幅広く体系的に収集するとともに、希少的価値のある作品を積極的に収集する。

・国際的に評価が高く、当館の将来的な展覧会のみならず、国内外の美術館での活用が期待できる作品。
石川直樹、今森光彦、川内倫子（第三期重点収集作家）

(2) 東京都写真美術館の展覧会で取り上げた作家の写真・映像作品等、東京都写真美術館の美術館活動に資する作品を収集する。

・令和7年度「TOPコレクション トランスフィジカル」展
アーウィン・オラフ
・令和7年度「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展
ルイジ・ギッリ
・令和7年度「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」展
ペドロ・コスタ
・令和7年度「作家の現在 これまでとこれから」展
石内都（第二期重点収集作家）、志賀理江子、金村修（第三期重点収集作家）

(3) 国内外の主要な賞を受賞した作家、国内外の主要展覧会において取り上げられた作家の作品など、活躍の著しい新進作家の写真・映像作品を収集する。

・令和7年度「日本の新進作家vol.22」出品作家 4作家
スクリプカリウ落合安奈、寺田健人、甫木元空、岡ともみ

II 東京都写真美術館購入

1 購入作家及び点数

1作家 1点

2 考え方

写真・映像史の上で重要な国内外の作家・作品を幅広く体系的に収集するとともに、希少的価値のある作品を積極的に収集する。

・写真史に欠かせない重要作家の希少価値が高い19世紀写真作品。作品状態が極上であり、当館の看板コレクションとなる逸品。
ロジャー・フェントン

III 寄贈

1 寄贈作家数及び点数

28作家 277点

2 考え方

東京都写真美術館「収集の基本方針」に基づき、作品収集を行う。

令和7年度収集点数：376点

【内訳】国内写真作品：297点 海外写真作品：17点 映像作品資料：62点 写真資料：0点

東京都写真美術館コレクション点数：39,135点

【内訳】国内写真作品：26,230点 海外写真作品：6,150点 映像作品資料：2,695点 写真資料：4,060点

【東京都購入作品】

作家名	作品名/シリーズ名等	技法	サイズ(mm)/尺	制作年	点数	備考
石内都	〈ひろしま〉	発色現像方式印画	1540×1000 他	2016 他	7	令和7年度「作家の現在」展出品作品
石川直樹	〈K2〉	発色現像方式印画	730×900	2022~2025	6	
今森光彦	〈にっぽんの里山〉	発色現像方式印画	190×282	2013 他	20	令和6年度「今森光彦 にっぽんの里山」展出品作品
金村修	〈China White〉 他	ゼラチン・シルバー・プリント (D.O.P)	458×564	2009 他	10	令和7年度「作家の現在」展出品作品
志賀理江子	《襲男》 他	発色現像方式印画	1000×1500 他	2024 他	9	令和7年度「作家の現在」展出品作品
スクリプカリウ 落合安奈	《ひかりのうつわ》	発色現像方式印画	395×595	2025	6	新進作家vol.22出品作品
寺田健人	〈想像上の妻と娘にケーキを買ってかえる〉	発色現像方式印画	450×600	2025	6	新進作家vol.22出品作品
甫木元空	〈窓外〉	インクジェット・プリント	356×270 他	2023	10	新進作家vol.22出品作品
川内倫子	《Illuminance》 他	ビデオ	可変	2001~2026	2	2チャンネル・ビデオ
岡ともみ	〈サカサゴト〉	ミクスト・メディア	405×213×104 他	2023	5	新進作家vol.22出品作品
ルイジ・ギッリ	《ペナーティ邸、マゾーネ、レッジョ・エミリア、1985》 他	発色現像方式印画	360×440 他	1985	6	令和7年度「ルイジ・ギッリ」展出品作品
アーウィン・オラフ	《Auf dem See》	インクジェット・プリント	1100×1650	2020	1	令和7年度「TOPコレクション トランスフィジカル」展出品作品
ベドロ・コスタ	〈今こそ名高き人々を講えよう〉	その他のフィルム	シングルチャンネル・ビデオ オ (10点組)	2025	10	令和7年度ベドロ・コスタ展出品作品
合計					98	

【東京都写真美術館購入作品】

作家名	作品名/シリーズ名等	技法	サイズ(mm)/尺	制作年	点数	備考
ロジャー・フェントン	《南翼廊から臨む身廊・ソールズベリー大聖堂・イギリス》	鶏卵紙	302×311	1858	1	
合計					1	

*東京都写真美術館購入作品は、収蔵委員会における収集決定後、(公財) 東京都歴史文化財団から東京都へ寄贈する。

作品収集実績

【寄贈作品】

作家名	作品名/シリーズ名等	技法	サイズ(mm)/尺	制作年	点数	備考
スクリプカリウ 落合安奈	《ひかりのうっわ》	発色現像方式印画	395×595	2025	5	
寺田健人	《想像上の妻と娘にケーキを買ってかえる》他	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)他	50×40 他	2018 他	12	日本の新進作家vol.22出品作品
浦木元空	《窓外》	インクジェット・プリント	356×270 他	2023	21	日本の新進作家vol.22出品作品
川久保ジョイ	《Dungeness I》他	発色現像方式印画	490×590	2022	2	
伊藤雅浩	《Velocity = Distance/Time #b-94》	インクジェット・プリント	1485×990	2021~2022	1	
伊奈英次	《終戦75年後のマッカーサー道路》	インクジェット・プリント	1000×1250	2014~2020	1	
苅部太郎	《あの海に見える岩を、弓で射よ #194》	インクジェット・プリント	1120×836	2023	1	
倉谷卓	《Backdrop for Blooms》	インクジェット・プリント	900×600	2024	1	
小平雅尋	《生池城跡 沓岐島 2016.8.1》他	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	526×347 他	2016~2018 他	4	
小山泰介	《LIGHT FIELD 031》他	インクジェット・プリント	1040×780 他	2015 他	2	
鈴木理策	《White 12, H-511》	発色現像方式印画	952×1190	2012	1	
武田陽介	《011035》他	発色現像方式印画	1000×750 他	2022~2024 他	8	
Nerhol	《fumbling/C》他	その他の技法	507×609 他	2021 他	2	
村越としや	《An ensuing evanescence》他	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	600×1800 他	2012~2021 他	2	
山谷佑介	《201307201851-2126 20000V》他	インクジェット・プリント	700×1010 他	2013 他	4	
横田大輔	《Untitled》	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	1400×2200	2021	1	
フォトグラフ アーナル	《Flesh Love》他	インクジェット・プリント	399×299 他	2010 他	98	
松村明	《ありふれた長崎》他	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	431×361 他	2016 他	57	
アーウィン・オ ラフ	《April Fool》	インクジェット・プリント	605×907	2020	2	令和7年度「TOPコレクション トラン スフィジカル」展出品作品
ルイジ・ギッリ	《モデナ, 1978》	発色現像方式印画	360×246	1978	1	令和7年度「ルイジ・ギッリ」展出品 作品
ペドロ・コスタ	《Povo de Lava》	インクジェット・プリント	1000×800	2015	5	令和7年度ペドロ・コスタ展出品作 品 和紙にインクジェット・プリント
ルーカス・ブレ イロック	《Vampire Retainer》	インクジェット・プリント	1067×1194	2022	1	
岡ともみ	《サカサゴト》	ミクスト・メディア	460×220×130 他	2023	7	日本の新進作家vol.22出品作品
居田伊佐雄	《Far from the explosive form of fruit》 他		シングルチャンネル・ヴィデ オ(オリジナルフィルム、デ ジタル版)	1972他	34	
小森はるか	《春、阿賀の岸辺にて》	その他の技法	シングルチャンネル・ヴィデ オ(64分54秒/HD/ステ レオ/日本語・英語字幕付)	2025	1	恵比寿映像祭2025コミッション・ブ ロジェクト出品に伴う寄贈
永田康祐	《Fire in Water》	その他の技法	Edition 1/5+AP シングル チャンネル・ビデオ(45 分/HD/ステレオ/カラー /日本語/韓国語・日本語 英語字幕版)(ランプ付き)	2025	1	恵比寿映像祭2025コミッション・ブ ロジェクト出品に伴う寄贈
牧原依里	《三つの時間》	その他の技法	シングルチャンネル・ヴィデ オ(10分/HD/サイレント /カラー ①撮影した映像 ②リアルタイムでの映像2か 所の組み合わせでの展示/ 上映を条件とする)	2025	1	恵比寿映像祭2025コミッション・ブ ロジェクト出品に伴う寄贈
小田香	《母との記録「動く手」》	その他の技法	シングルチャンネル・ヴィデ オ(24分41秒/HD/ステ レオ/カラー/日本語・日 本語英語字幕付)	2025	1	恵比寿映像祭2025コミッション・ブ ロジェクト出品に伴う寄贈
合計					277	

令和7年度新収蔵作品の紹介

東京都購入案件



石内都 〈ひろしま〉より《#145 donor: Sachiko, M.》 発色現像方式印画 2025年



石川直樹 〈K2〉より《K2-Broad Peak #097》 発色現像方式印画 2022~2025年



今森光彦
〈にっぽんの里山〉より《カタクリにやって来たギフチョウ 山形県鶴岡市 2010》
発色現像方式印画 2010年



金村修 〈China White〉より ゼラチン・シルバー・プリント 2009年



志賀理江子 《襲男》 発色現像方式印画 2024年



スクリプカリウ落合安奈 《ひかりのうつつわ》 発色現像方式印画 2025年



寺田健人 〈想像上の妻と娘にケーキを買って帰る〉より
《After playing in the park with my daughter》
発色現像方式印画 2021年



甫木元空 〈窓外〉より インクジェット・プリント 2023年



川内倫子 《M/E》 2チャンネル・ビデオ 2022年



岡ともみ 〈サカサゴ〉より ミクスト・メディア 2023年



ルイジ・ギッリ 〈コダクローム〉より《バステリア、1976》
発色現像方式印画 1976年



アーウィン・オラフ 〈Im Wald〉より《Auf dem See》
インクジェット・プリント 2020年



ロジャー・フェントン 《南翼廊から臨む身廊・ソールズベリー大聖堂・イギリス》
鶏卵紙 1858年



ペドロ・コスタ 〈今こそ名高き人々を讃えよう〉より
シングルチャンネル・ビデオ 2025年

【東京都写真美術館図録論文】

大崎千野

「総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家vol.22」『総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家vol.22』展図録、東京都写真美術館、2025年、pp.8-11

田坂博子

「未来への手紙——ペドロ・コスタの展示」『ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ』展図録、東京都写真美術館、2025年、pp.166-182

室井萌々

「W.ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」『W.ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代』展図録、東京都写真美術館、2025年、pp.133-143

山田裕理

「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」『総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景』展図録、東京都写真美術館、2025年、pp.177-182

【東京都写真美術館紀要No.25】

石田哲朗

「内藤正敏の語ったことー『異界出現』展トークイベント記録(1)」 pp.9-23

大西達貴

「比嘉康男の初期作品群〈生まれ島・沖縄〉にみる目差しの形成ー「沖縄問題的な視点」と「私」の視点の狭間でー」 pp.53-67

堀田文

「国内美術館におけるレジストラの実務と現状ー総合開館30周年記念トークセッション『美術館のコレクション・ケア：レジストラと美術輸送の視点から見るコレクションの現在とこれから』開催記録・質疑応答を通して」 pp.35-50

三浦晃

「実験と実践の場ーギャラリーOWLー」 pp.69-79

山田裕理

「ルイジ・ギッリ〈アトランテ〉シリーズについての研究ノート」 pp.25-33

【寄稿】

石田哲朗

「東京都写真美術館コレクションを通して100年を振り返る」『日本写真学会誌』第88巻第2号、一般社団法人日本写真学会、2025年、pp.115-118

伊藤貴弘

「長島有里枝」『AWARE: Archives of Women Artists, Research & Exhibitions』(https://awarewomenartists.com/artists_japan/)

“Timberlake, not Bieber”, *Parklife*, issue 3, 2025, p.89.

「好奇心とユーモア——松江泰治の〈ANDALUCIA〉について」松江泰治『ANDALUCIA 1988』青幻舎、2025年、pp.82-85。

「人々の姿と記録の重み——神奈川で『阿波根昌鴻写真展』を見て」『沖縄タイムス』2025年10月8日。

「ポストコロナのランドスケープ——足立涼の〈I Want To Check The Shape of Trees〉について」足立涼『I Want To Check The Shape of Trees』私家版、2025年、n. p.

“Pilgrimage and Photography: On CHOI Yohan’s *Nonlinear*”, Choi Yohan, *24/25 MH TALENT PORTFOLIO VIEW REVIEW*, Museum Hanmi, 2025, n.p.

遠藤みゆき

「写真と絵画 19世紀から現在へ」『MORE THAN ONE WORLD New Japanese Photography 50 Years On』赤々舎、2025年、pp. 210-215

佐藤真実子

「境界線をゆるませる言葉をもつこと」『Exploring II 一日常に息づく芸術のかけらー』展図録、スパイラルガーデン、一般社団法人日本現代美術振興協会、2025年、p.80

下倉久美

「東京都美術館でのダンス・ウェルの試み」(ICOM日本委員会 (WEB) に2023年8月掲載記事の韓国語翻訳版)、Museum Connection、ICOM 韓国、2025年9月

田坂博子

「映像をいかに残すか：ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編『映像アーカイブ・スタディーズ』」(書評、『映画芸術』(491号、2025年04月30日発行) pp.132-133

「第3回 札幌駅前通アワード・最優秀賞審査員講評」、2025年12月15日、<https://www.sapporoekimae-management.jp/news/award2025prize/>

「DJピロピロ誕生、あるいは形而上学」『大大木裕之展』特別冊子、2026年3月号

「キュレーター・学芸員が選ぶ2026年おすすめの展覧会」『文藝春秋』2026年5月号

丹羽晴美

「VOCA所感」『VOCA2026』公益財団法人日本美術協会 上野の森美術館、2026年、pp.10-11

室井萌々

“Quietly Standing ‘In-Between,’” in *Nakagawa Osamu James: Witness Trees + Indelible Structures* (exhibition catalogue), Sobido Press for Houston FotoFest, 2026, pp.32-33, p.36.

山口孝子

「2024年の写真の進歩、6. 画像保存～展示・修復・保存関係～」、『日本写真学会誌』、第88巻第3号、一般社団法人 日本写真学会、2025年、pp.214-216.

「写真の実物保存について」、『情報の科学と技術』、Vol.75, No.11, 一般社団法人 情報科学技術協会、2025年、pp.544-552.

「Museum Preservation: Past, Present, and Future」, *Senri Ethnological Studies* 113, National Museum Ethnology, 2026年、pp.165-196 (査読有).

山崎香穂

“地域レビュー (東京) : 山崎香穂評「細野さんと晴臣くん」展、「すずえり」展”. ウェブ版「美術手帖」. 2025. <https://bijutsutecho.com/magazine/review/30953>, (参照 2026-01-15)

地域レビュー (東京) : 山崎香穂評「野村在 どうしようもなくかけがえのない」, 「クリスティーナ・サン・キム」. ウェブ版「美術手帖」. 2025. <https://bijutsutecho.com/magazine/review/31431> (参照 2026-01-15)

山田裕理

“TRAILBLAZERS: TOKIWA TOYOKO & YAMAZAWA EIKO,” *Women Photographers 1900-1975: A Legacy of Light* [exhibition catalogue], National Gallery of Victoria, Hatje Cantz, 2025, pp.147-150

“Shima Ryu,” *AWARE: Archives of Women Artists, Research & Exhibitions*, 2025, Online

“Ushioda Tokuko,” *AWARE: Archives of Women Artists, Research & Exhibitions*, 2025, Online

「鈴木麻弓作品 審査員コメント」『T3 New Talents Five Views』展覧会小冊子、T3 Photo Festival Tokyo、2025年、p.33

“Life Studies by Fujioka Aya. Published by AKAACA,” *Favorite Photobooks 2025 — The Big List*, *LensCulture*, 2025, Online

「30人が選ぶ2025年の展覧会90」美術手帖、2025年、オンライン

“Luigi Ghirri Infinite Landscapes interview,” *Photo Art*, February 2026, 442 issue, pp.40-43

「講評」『年鑑 日本の広告写真 2026』社団法人日本広告写真家協会、2026年、p.88

「本橋成一追悼文」『西日本新聞』2026年1月22日朝刊

【学会発表】

山口孝子

「保存科学専門員の仕事とは」、2025年度日本写真学会年次大会、

東京工芸大学中野キャンパス6号館、2025年6月1日

【講演会・シンポジウム等】

石田哲朗

「鈴木麻弓 個展『The Tide's Gift』トークイベント②石田哲朗×鈴木麻弓」、KANA KAWANISHI、2025年9月12日

伊藤貴弘

「松岡一哲個展『もっと深くて鋭くて、危なくて、たまらなく美しいやつ。普通じゃないもの。』松岡一哲×伊藤貴弘 トークイベント」、AXISギャラリー、2025年9月20日

「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO関連企画 特別トークセッション」 嶋村吉祥丸×伊藤貴弘、ATELIER MUJI GINZA、2025年10月21日

「高橋実希個展『あの庭の花／Specimens』伊藤貴弘×高橋実希 トークイベント」、LAG、2025年11月8日

「鈴木敦子写真展『Appear』鈴木敦子×伊藤貴弘 トークイベント」、Alt_Medium、2025年11月16日

遠藤みゆき

“Contemporary Japanese Photography Exhibition in Tokyo Photographic Art Museum,” *Seeing New Photography: Practices of Art Institutions, Taiwan International Photography Festival*, 6 September 2025

“Exploring Photographic Media —Through the Exhibitions of the Tokyo Photographic Art Museum—,” *Sober Night with Arts, DECK*, 19 November 2025

“The Activities of the Tokyo Photographic Art Museum — Exhibiting, collecting, and preserving photographs—,” *How We Gather*, National Gallery Singapore, 22 December 2025

小林麻衣子

「菊谷達史『ビジターズ／VISITORS』」展トークイベント、YY ARTS、2026年1月17日

「北田瑞絵個展」トークイベント、LAG、2026年2月14日

下倉久美

「からだ全体で作品を鑑賞し表現を交歓するー『ダンス・ウェル』の試み」、*Creative Ageing in Italian and Japanese Museums* (ビデオ会議)、イタリア、マチェラータ大学、2025年9月23日

田坂博子

「シンポジウム「ART OSAKA 2025 Screening Program」」、大阪市中央公会堂、2025年6月7日

『『大大木裕之展』イベント：大大木裕之を考える part1』(松井茂、越後谷卓司)、Aet Center NEW、2026年3月29日

中野(鈴木) 敬子

「マルバ総括フォーラム」パネリスト

湘南国際村センター、2026年2月28日

主催：マルバ実行委員会／公益財団法人かながわ国際交流財団

出演：水沢勉 ホセイン・ゴルバほか

丹羽晴美

「VOCAの現在 ― 身体の記憶」(拝戸雅彦、尾崎信一郎、服部浩之、原久子、受賞作家)、上野の森美術館、2026年3月13日

山田裕理

「KKFフォトフェスト ポートフォリオレビュー」レビュアー、軽井沢フォトフェスト、旧軽井沢音羽ノ森、2025年4月27日

「T3 Photo Talk Session New Talent: What Does It Mean Today?」(登壇者：鷹野隆大、山田裕理、モデレーター：太田睦子)、T3 Photo Festival Tokyo、東京ミッドタウン八重洲5F STUDIO、2025年10月11日

「シンポジウム ルイジ・ギッリ〈ジョルジョ・モランディのアトリエ〉シリーズをめぐって」(登壇者：ジーン・ルオッツィ、岡田温司、モデレーター：山田裕理)、イタリア文化会館、イタリア文化会館 東京、2025年7月3日

「Special Talk 学芸員ってどんなお仕事?」book obscura、オンライン、2025年8月2日

“Japanese Photography 1960s-2020s” University of the Arts London, 18th November. 2025

“Curator’s talk for the solo exhibition Infinite Landscapes by Italian photographer Luigi Ghirri” Museum Hanmi, Korea, 13th December, 2026

「群馬パーセントフォーアート「アート教育」ワークショップ」群馬県地域創生部文化振興課、伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校、2026年2月28日

邱 于瑄

Curator's talk for "Safe Room" Screening Feature, Museum of Contemporary Art, Taipei, Taiwan, 23rd August, 2025

【非常勤講師等】

伊藤貴弘

女子美術大学「写真史」前期、東京藝術大学美術学部「写真史」2026年1月15日、京都芸術大学通信教育部写真コース「特別講義」2026年1月20日

遠藤みゆき

明治学院大学「デジタルアート論A/デジタルアート論1A」春学期

明星大学「博物館概論」秋学期

関西大学「現代映像芸術論」2025年10月10日

小林麻衣子

日本写真芸術専門学校「現代写真論」秋学期

佐藤真実子

立教大学 学校・社会教育講座学芸員課程「美術史1」春学期

中央大学 学芸員課程「学内実習」2025年7月13日

専修大学 文学部「学際科目10(岡本太郎)」2025年12月6日

田坂博子

東京藝術大学美術学部「写真映像論」2025年5月7日、5月13日

女子美術大学「映像文化概論」秋学期

丹羽晴美

学習院女子大学国際文化交流学部「国際文化交流演習」春学期、

法政大学国際文化学部「写真論」秋学期

山口孝子

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、令和7年度「博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)」、2025年7月11日

独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター、令和7年度「博物館・美術館等保存担当学芸員研修(基礎コース)」、2025年8月1日、2026年1月30日

山崎香穂

明星大学「博物館情報・メディア論」秋学期

明星大学「博物館概論」2025年9月22日、29日

山田裕理

明治学院大学「現代社会と芸術III A, B」春学期・秋学期

武蔵野美術大学「写真テクノロジーA-II」2025年10月8日、10月15日、11月5日

【委員・審査員等】

石田哲朗

第7回目黒観光写真コンクール、めぐろ観光まちづくり協会、審査員

伊藤貴弘

「KYOTOGRAPHIE International Portfolio Review 2025」レビュアー、「HARIBAN AWARD 2025」審査員、「東京造形大学写真研究所展公開講評会」ゲスト、「2025 Jimei x Arles International Photo Festival」アート・コミッティー

小林麻衣子

第59回かわさき市美術展(写真部門) 審査員

佐藤真実子

公益財団法人戸部眞紀財団 芸術活動助成 選考委員

下倉久美

International Advisory Committee (Hong Kong Jockey Club Dance Well Hong Kong Project)

文化庁「令和7年度 文化芸術のデジタル基盤強化・活用促進事業『文化芸術団体の活動の価値を可視化するデジタルツールの検討・実証』」に関する技術審査委員

中野(鈴木) 敬子

一般社団法人日本写真学会 幹事、「写真の教育への応用」研究会主査

丹羽晴美

東川賞審査員(東川町)、VOCA2026展選考委員、日本写真保存センター諮問委員、独立行政法人日本芸術文化振興会クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業アドバイザー、国立近代美術館美術作品購入等選考委員会委員、nominator for the Prix Pictet Award他

田坂博子

「第3回 札幌駅前通アワード」審査員、東京藝術大学課程博士学位審査委員会副査(鈴木光(映像メディア学) 美術と映像「エッセイフィルム論」)

三井圭司

文化庁資料調査員、鳥取県美術資料収集評価委員、上田市城郭整備委員会委員

室井萌々

令和7年度(第76回) 東京都立高等学校定時制通信制芸術祭 写真部門審査員

山口孝子

日本写真学会理事、日本写真学会画像保存研究会委員、公益社団法人日本写真家協会「日本写真保存センター」諮問委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員

山田裕理

軽井沢フォトフェスト審査委員、公益社団法人日本広告写真家協会公募展 広告作品部門審査委員、The LensCulture Critics' Choice Awards 2025審査員

【インターン】

東京都写真美術館では、平成20年からインターン制度を導入している。令和7年度も指導学芸員と共に美術館のスタッフとして展覧会事業補助、教育普及プログラム補助等を担当し、将来の写真・映像文化を支える専門的な人材育成を行った。

大西達貴

担当業務：「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」展(展覧会準備補助)、展覧会実施に関する学芸業務補助、作品管理補助、収蔵作品資料調査

指導員：事業第一係主任 山田裕理

期間：令和7年4月1日～令和8年3月31日

三浦 晃

担当業務：パブリックプログラム、スクールプログラム、社会包摂プログラム、ボランティア業務(教育普及事業補助)、「恵比寿映像祭2026」教育普及プログラム実施補助

指導員：普及係主任 佐藤真実子

期間：令和7年4月1日～令和8年3月31日

(令和7年度日本大学芸術学部澤本徳美賞受賞、修士論文「コミュニケーションシステムとしての自主運営ギャラリーと写真家の主体的な活動—1970年代の写真家によるオルタナティブな「場」を通して—」に対して)

調査研究・普及活動 (アーカイブ研究会)

映像音響資料の保存管理および各種アーカイブ構築の技術と実践に関わる専門機関や教育機関の職員、研究者、技術者等および関連企業等との研究および情報交流の機会として、平成29年度より定期的にアーカイブ研究会を実施している。第8回目となる今回は、TOKYOスマート・カルチャー・プロジェクトの一環として恵比寿映像祭2026において、マイグレーションに関わるシンポジウムのなかで、通常の研究会に代わる機会を設けた。

令和7年度は総合開館30周年を記念した展覧会やイベント等の広報を通じ、だれもが写真・映像文化に親しめる機会を創出した。特に参加型イベント、来館プレゼント、出品作家の映像配信、地域との連携強化など、ライトユーザーから愛好者までが気軽に当館にアクセスするための広報を企画・実施した。また、30周年スペシャルサイトや公式SNSを運営し年間を通じて30周年を盛り上げた。

1 広報誌発行

a. 「東京都写真美術館ニュースeyes (アイズ)」

(vol.121~124)

季刊、発行部数：各10,000部

今年度から、インタビュー記事を見開きで読める仕様にリニューアル。出品作家や関係者にお話を伺い、展覧会における理解度を深める記事を制作した。ウェブサイトやSNSでも展開し、多くの方へ向けて、展覧会、館事業を告知した。

<巻頭記事・メインテーマ>

121号「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」

122号「総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」

123号「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」

124号「W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」

「2026年度年間スケジュール」



eyes121号



eyes122号

b. 広報誌別冊「nya-eyes (ニアイズ)」 vol.167~vol.174

不定期(年8回)、発行部数：各号25,000部

さまざまな美術館活動を親しみやすく紹介することを目的に、広報誌「eyes」の別冊として、漫画家カレー沢薫氏とコラボレーションした「nya-eyes (ニアイズ)」を発行した。



ニアイズ167号



ニアイズ173号

2 プレスリリース、チラシの配布およびポスター掲示

各展覧会についてプレスリリースを制作し、展覧会開催の2か月前を目途に、テレビ・ラジオ・雑誌・WEB等幅広いメディアにメール配信および郵送するとともに(約700件)、PR TIMESのプレスリリース配信サービスを用いて配信した。あわせて、A4チラシとB2ポスターを全国の美術館、ギャラリー、教育施設、財団関係各所、恵比寿ガーデンプレイス周辺や、地域連携各施設に配布した(約350件)。

3 プレス対応

令和7年度は、館の取組みや総合開館30周年記念事業についてなど、幅広い取材依頼に対応した。プレスリリースの早期配信による告知強化やバラエティーに富んだ作品図版の提供を心がけ、作家や担当学芸員へのインタビュー取材も積極的に受けるなど、展覧会をわかりやすく紹介するため柔軟に対応した。2月には記者ブリーフィングを開催し、次年度の展覧会ラインナップ、教育普及事業、社会共生の取り組み等について紹介した。そのほか広報東京都をはじめ、東京都、財団関係の掲載メディアへも情報提供をおこなった。



東京新聞(夕刊)掲載記事(令和7年4月16日掲載)

a. プレス内覧会

展覧会名(開催日、参加人数)

「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」(令和7年4月7日、56名)

「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」(令和7年7月2日、78名)

「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」(令和7年7月2日、78名)

「総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」(令和7年8月27日、73名)

「総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」(令和7年9月29日、53名)

「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」(令和7年10月14日、51名)

「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」(令和8年2月5日、76名)

「W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」(令和8年3月16日、74名)



「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」 プレス内覧会より



「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」 プレス内覧会より



「作家の現在 これまでとこれから」 プレス内覧会より

b. 記者ブリーフィングの実施

開催日：令和8年2月12日

出席者数：20名

〈ブリーフィング項目〉

〈第一部〉 大会議室

- ・ 令和8年度展覧会概要説明
- ・ 質疑応答

〈第二部〉 1階スタジオ

- ・ 伊東館長、館職員との懇親会
- ・ 社会共生の活動紹介と機器の展示



4 展覧会広報実績

a. 「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映2件、ラジオ放送4件 (2/26・27 J-WAVE「DIG UP!」、5/4 J-WAVE「ACROSS THE SKY」ほか。作家、担当学芸員が出演し、展覧会の見どころを紹介)、新聞64件 (3/10毎日新聞(夕刊)、4/22朝日新聞(夕刊)、4/23福井新聞ほか。展評、作家インタビュー、図録書評掲載)、雑誌・WEB181件 (4/9「POPEYE」2頁、5/1「婦人画報」、4/10「IMA ONLINE」、4/15「AXIS」ほか)

[広告出稿]

- ・ 交通広告(車内サイネージ) 東急・都営線 (3/24~3/30)
- ・ 交通広告(ポスター) 東京メトロ乃木坂駅 (2/26~3/25)
- ・ SNSターゲット広告(X(旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック) (①2/26~3/12、②3/14~3/28、③5/21~6/4)
- ・ e-flux (2/16)
- ・ J-WAVE特別番組制作「DIG UP!」(計2回)、「RECOMENTA!」(計7回)、「J-WAVE SELECTION PHOTOGRAPHY BEYOND TIME - 東京都写真美術館の30年」、スポットCM
- ・ 恵比寿ガーデンプレイススカイウォークバナー (2/27~3/19)

[その他]

- ・ 広報誌「eyes」と連動した作家インタビュー動画を制作。公式ウェブサイト、SNSで展開した。
- ・ グラフィックデザインや展示構成について、展覧会と並行して継続的に発信。新聞の年末回顧記事で、「2025年印象に残った展覧会」として各紙で紹介された。



婦人画報6月号掲載



朝日新聞(夕刊)掲載記事(令和7年4月22日掲載)



POPEYE5月号掲載

b. 「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件(5/7イッツコム)、ラジオ放送2件(5/18 J-WAVE「ACROSS THE SKY」)、新聞21件(7/12 Japan Timesで本展を含む総合開館30周年記念展を紹介)、雑誌・WEB 146件

[広告出稿]

- ・交通広告(デジタルサイネージ) JR恵比寿、東京、品川、上野、秋葉原(4/21-4/27)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック)(4/23-5/8)
- ・J-WAVE特別番組制作「J-WAVE SELECTION PHOTOGRAPHY BEYOND TIME -東京都写真美術館の30年」、同スポットCM

[その他]

- ・出品作家4名(江成常夫、大塚千野、片山真理、山上新平)のインタビューテキストを総合開館30周年記念ウェブサイトに掲載
- ・展覧会予告および会場風景のショート動画を制作し、作品解説とあわせてオウンドメディアおよびSNS広告にて配信
- ・総合開館30周年記念として、本展出品作品5点を掲載したステッカーを作成し、展覧会をご覧の方に配布(期間中合計配布枚数:約25,100枚)



毎日新聞掲載記事(令和7年5月19日掲載)



J-WAVE「J-WAVE SELECTION PHOTOGRAPHY BEYOND TIME -東京都写真美術館の30年」告知

c. 「総合開館30周年記念 ルイジ・ギッリ 終わらない風景」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映2件、ラジオ放送1件(7/27 J-WAVE「ACROSS THE SKY」)、新聞56件(7/14毎日新聞(夕刊)、8/6読売新聞(夕刊)、8/29朝日新聞ほか。展評、インタビュー記事掲載)、雑誌・WEB174件(5/20 Harper's BAZAAR、8/1 Pen、8/25 芸術新潮4頁、7/10 &Premium.jp、8/31 Casa BRUTUSオンラインほか。作家遺族、担当学芸員へのインタビュー、展覧会レビューなどの特集記事掲載)

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀線総武線快速(8/11~8/17)

- ・交通広告(デジタルサイネージ) 六本木駅、上野駅(7/1~31)
- ・交通広告(ポスター) JR・東京メトロ主要駅(①7駅6/30~7/15、②8駅8/4~31、③8駅8/18~9/18)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック)(①6/25~7/9、②8/14~8/28、③9/11~9/25)
- ・恵比寿ガーデンプレイススカイウォークバナー(7/3~23)

[その他]

- ・出品作品を掲載したステッカーを作成し、展覧会をご覧の方に配布
- ・ワインショップや書店など近隣店舗とのコラボ企画を実施
- ・東京都のInstagram「Tokyo Arts & Culture」にて動画配信
- ・ミュージアムラリー2025(8/6~9/28)に出題参加
- ・サマーナイトミュージアム「ミニコンサート "Museum × Music!"」開催(9/11)
- ・SNSにて図版を活用した作品紹介を投稿



毎日新聞掲載記事(令和7年7月14日(夕刊)掲載)

Harper's BAZAAR 7・8月号掲載



芸術新潮9月号掲載

d. 「総合開館30周年記念 TOPコレクション トランスフィジカル」

[記事掲載・テレビ放映]

ラジオ放送1件(8/25 J-WAVE「ACROSS THE SKY」)、新聞7件(毎日新聞『美の越境』、朝日新聞『美の履歴書』)、雑誌・WEB59件

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀線総武線快速(8/11~8/17)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック)(7/18~8/1)

・恵比寿ガーデンプレイススカイウォークバナー (7/3~7/23)

[その他]

- ・展覧会予告および会場風景のショート動画を制作し、作品解説とあわせてオウンドメディアおよびSNS広告にて配信
- ・総合開館30周年記念企画として、本展出品作品5点を掲載したステッカーを制作し、展覧会をご覧の方に配布(期間中合計配布枚数:約24,000枚)



毎日新聞掲載記事(令和7年8月14日掲載)



会場風景ショート動画

e. 「総合開館30周年記念 ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」

[記事掲載・テレビ放映]

ラジオ放送5件(9/2J-WAVE「ピープルズ・ロースタリー」ほか)、新聞30件(9/6日本経済新聞、10/7読売新聞、ほか作家インタビュー、展評)、雑誌・WEB183件(ポパイ12月号、映画芸術2025年秋号ほか)

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル)山手線・横須賀総武線快速(9/8~9/14)
- ・SNSターゲティング広告①(X(旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック)(1期:9/1~9/15 2期:11/25~12/6)
- ②(X(旧ツイッター)・Instagram・ティックトック)(10/31~11/9)
- ・J-WAVE後援に係る特別番組制作「DIG UP!」計2回、「STEP ONE」、同スポットCM
- ・e-flux(8/29)

[その他]

- ・予告動画および会場風景動画を制作し、館内およびユーロスペースにて予告上映したほか、YouTube・Instagramで配信(合計再生回数49,610回)
- ・映画専門の外部広報スタッフと連携し、10本以上のインタビューおよび展評記事を獲得

・展覧会チラシおよび上映チラシをそれぞれ主要劇場、映画・映像のフェスティバルで配架

・J-WAVE主催イベント「TOKYO ART ODYSSEY - 研ぎ澄ませ! 五感-」参加



読売新聞掲載記事(令和7年10月7日掲載)

日本経済新聞掲載記事(令和7年9月6日掲載)



ポパイ12月号掲載

f. 「総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」

[記事掲載・テレビ放映]

新聞27件、雑誌・WEB125件

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル)山手線・横須賀総武線快速(10/27~11/2)
- ・交通広告(ポスター)JR東京、上野、横浜 東京メトロ恵比寿、新宿三丁目、上野、六本木、清澄白河(12/1~12/28)
- ・新聞広告(東京新聞 首都圏版)朝刊最終面全3段カラー2回(10/5、11/2)、(東京都23区版)夕刊中面全3段カラー1回(12/5)
- ・SNSターゲティング広告①(X(旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック)(9/30~10/14)②(X(旧ツイッター)・Instagram・ティックトック)(12/10~12/27)
- ・『日本写真年報2025』(発行:公益財団法人日本写真協会)表3表紙カバー折部分カラー1ページ

[その他広報]

- ・各作家のインタビュー動画を制作・配信(YouTube・Instagramでの合計再生回数43,500回)
- ・各作家および5名全員の計6本の会場風景ショート動画を制作・配信(YouTube・Instagramでの合計再生回数69,858回)



コマーシャル・フォト11月号掲載



作家インタビュー動画

g. 「総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映4件 (12/28 NHK Eテレ「日曜美術館アートシーン」ほか)、新聞30件 (11/8 The Japan Times、1/22共同通信ほか)、雑誌・WEB117件 (12/15 BRUTUS ほか。出品作家インタビュー記事掲載)

[広告出稿]

- ・交通広告 (JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀線総武線快速 (10/27~11/27)
- ・交通広告 (デジタルサイネージ) 東京駅、六本木駅 (1/5~1/11)
- ・交通広告 (ポスター) 東京駅、上野駅、横浜駅 (12/15~12/30)
- ・SNSターゲティング広告 (X (旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック) (①10/22~11/5、②11/27~12/15、③12/25~1/12)
- ・恵比寿ガーデンプレイススカイウォークパナー (10/7~11/3)

[その他広報]

- ・広報誌「eyes」と連動した作家インタビュー記事をSNSで展開
- ・各作家のインタビュー動画を制作・配信 (YouTube・インスタグラムでの合計再生回数50,356回)
- ・各作家および5名全員の計6本の会場風景ショート動画を制作・配信 (YouTube・インスタグラムでの合計再生回数93,543回)
- ・東京都造形大学にて学芸員参加のシンポジウム開催 (11/22)



BRUTUS1月号掲載



The Japan Times掲載記事 (令和7年11月8日掲載)



作家インタビュー動画

h. 「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映2件、ラジオ放送2件 (2/1「ACROSS THE SKY」、2/4J-WAVE「DIG UP!」)、新聞15件 (2/15読売新聞、2/16毎日新聞 (夕刊) ほか)、雑誌・WEB400件 (2/3フォーカス台湾、2/6MilK Magazine、2/14L.DOPEほか。出品作家、担当学芸員インタビュー記事掲載)

[広告出稿]

- ・交通広告 (JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀線総武線快速 (2/9~2/15)
- ・恵比寿ガーデンプレイススカイウォークパナー (2/3~2/23)
- ・SNS広告 (インスタグラム) (1/30~2/23)

[その他広報]

- ・美術館外壁懸垂幕の掲出
- ・恵比寿ガーデンプレイスタワーガラス面シート掲出
- ・オリジナルステッカープレゼント企画実施
- ・東京都のインスタグラム「Tokyo Arts & Culture」にて告知
- ・YouTube「Meet Your Art」にて、出品作家、担当学芸員インタビュー動画5本公開



読売新聞掲載記事 (令和8年2月15日掲載)



オリジナルステッカー



懸垂幕



毎日新聞(夕刊)掲載記事(令和8年2月16日掲載)

i. 「W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件(3/18 NHK「おはよう日本」)、ラジオ放送1件(3/29 J-WAVE「ACROSS THE SKY」)、新聞9件(3/30毎日新聞)、雑誌・WEB82件(旅の手帖3月号、esquire4月号)

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速(3/22~3/29)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・インスタグラム・フェイスブック)(3/17~4/5)
- ・J-WAVEスポットCM



毎日新聞掲載記事(令和8年3月30日掲載)



J-WAVE「ACROSS THE SKY」告知

5 存在感のある美術館づくりのための取り組み

総合開館30周年を迎えた本年度は、来館者への感謝を伝えるとともに、だれもが気軽に写真・映像に親しむ機会を作ることを目的に、周年に相応しくバラエティに富んだ方法で情報発信を行った。広報誌、公式ウェブサイト、プレス対応等を通じ、当館の展覧会や活動を紹介し、写真美術館をより身近に感じてもらうための施策を実施した。

a. 「総合開館30周年記念スペシャルサイト」

総合開館30周年を記念し、スペシャルサイトを運営した。30周年記念キャンペーンの情報発信をはじめ、作家インタビューや30周年トークセッションなどの特別コンテンツを掲載し、当館の展覧会や活動を広く紹介した。(71ページ参照)



b. 「総合開館30周年記念トークセッション 恵比寿ガーデンプレイススカイウォークパナー」

総合開館30周年を記念して開催した「総合開館30周年記念トークセッション 写真・映像とこれからの30年」および開催中の展覧会「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」「作家の現在これまでとこれから」を告知した。



c. 「記念ステッカープレゼント」

総合開館30周年を記念し、開催中の展覧会に出品されている所蔵作品を用いた記念ステッカーを制作し、展覧会入場者に配布した。複数の作品から選択できる形式とすることで、来館者が作品に親しむとともに、当館の収蔵品の幅広さを伝える機会となった。

[1期]

実施期間：令和7年1月31日(金)~6月22日(日)

配布枚数：約25,100枚

[2期]

実施期間：令和7年7月3日（木）～9月21日（日）

配布枚数：約24,000枚



d. 「TOPオリジナルプリントシールキャンペーン」

開催中の3展覧会の入場者を対象に、TOPオリジナルのプリントシール体験キャンペーンを実施した。プリントシールのデザインは、当館広報誌「ニアイズ」や普及プログラムのオリジナル動画に登場する「ネガぞう」などをモチーフとしたオリジナルデザイン全5種類を制作し、その中から好みの2種類を選択できる形式とした。日本のプリントシール機を体験したことのない外国からの来館者をはじめ、多くの来館者から好評を得た。

実施期間：令和7年9月2日（火）～9月15日（月・祝）

参加者数 645名



e. 「東京都写真美術館オリジナルしおり」

総合開館30周年を記念して、オリジナルしおりを制作。当館のロゴを使ったデザイン全4種類。スタイリッシュなデザインと大きさと使いやすさにもこだわった。ご来館時お持ち帰りできるよう、各階展示室入口のカウンターに設置。写真集や書籍を扱うコア層だけでなく、記念として幅広い層の来館者に親しまれた。

実施期間：令和7年10月16日（木）～令和8年1月14日（水）

配布枚数：約10,000枚



f. 「TOPのお正月2026」

正月開館の賑わいと東京都写真美術館の幅広い事業をPRすることを目的に、「TOPのお正月」を実施。無料入場のほか、ギャラリートークや雅楽演奏を開催した。

実施内容：

- ・展覧会の無料入場「作家の現在 これまでとこれから」「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」展
実施日：1月2日（金）、3日（土）
合計入場者数：6,490名

・「とっぷ雅楽」

実施日：1月2日（金） ①13:00 ②15:00 ※各回20分程度
参加者：①151名 ②244名 計395名

・担当学芸員による新春ギャラリートーク

「作家の現在 これまでとこれから」展
実施日：1月2日（金） 参加者：116名
「遠い窓へ 日本の新進作家 vol.22」展
実施日：1月3日（土） 参加者：122名

・新春来館プレゼント「TOPオリジナル筆箋」

実施日：1月4日（日）

・カフェご利用者（1,000円以上）に缶バッジをプレゼント

実施日：1月2日（金）、3日（土）、4日（日）

・ミュージアム・ショップでお買い上げの先着50名様にポストカードをプレゼント

実施日：1月2日（金）、3日（土）



とっぷ雅楽

6 屋外掲出（年間契約、有料）

a. 恵比寿ガーデンプレイス周辺広告

・スカイウォーク電飾看板

「鷹野隆大 カスババーこの日常を生きのびるためにー」～6/8

「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」6/9～8/24

「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」8/25～10/13

「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」「作家の現在 これまでとこれから」10/14～12/7

「作家の現在 これまでとこれから」12/8～1/25

「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音|Polyphonic

Voices Bathed in Sunlight] 1/26～2/23

「W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」 2/24～

- ・ポスターボード
- ・自立サイン看板

b. 美術館外壁

- ・巨大写真ディスプレイ
- ・懸垂幕

c. JR恵比寿駅周辺広告

- ・ポスター（東口／恵比寿ガーデンプレイス方面）
「鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きるための―」 ～4/4
「TOPコレクション 不易流行」 4/5～6/22
「TOPコレクション トランスフィジカル」 6/23～8/27
「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」 8/28～9/28
「遠い窓へ 日本の新進作家 vol. 22」 9/29～1/7
「作家の現在 これまでとこれから」 1/8～1/25
「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」 1/26～2/23
「恵比寿映像祭2026 コミッション・プロジェクト&東京都コレクション」 2/24～3/22
「TOPコレクション Don't think. Feel.」 3/23～
- ・サイン看板（西口／日比谷改札方面）



スカイウォーク電飾看板



ポスター（東口／恵比寿ガーデンプレイス方面）



自立サイン看板



巨大写真ディスプレイ



サイン看板（西口／日比谷改札方面）

7 財団との広報連携

a. 「サマーナイトミュージアム2025」

実施期間：令和7年8月14日～9月26日の木・金曜日

開館時間：21:00まで（ご入館は20:30まで）

観覧料：17:00以降の入館について、学生・中高生無料、一般・65歳以上は団体料金

対象の展覧会：「TOPコレクション トランスフィジカル」「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」「ペドロ・コスタ インナーヴィジョンズ」

b. 「ミュージアムで謎解きを ミュージアムラリー2025」

実施期間：令和7年8月6日（水）～9月28日（日）

参加施設：東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館、東京都美術館、東京都庭園美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、東京都渋谷公園通りギャラリー

当館参加者数：2,111名

c. ミニコンサート「東京都写真美術館×東京文化会館」

実施日：令和7年9月11日（木）①18:30-18:50 ②19:30-19:50

場所：2階ロビー

観覧者数：①108名 ②76名 計184名

d. 「Welcome Youth (ウェルカムユース) 2026」

18歳以下を対象に観覧料を無料にするほか、デジタル版スタンプリリーを開催した。

実施期間：令和8年3月1日（日）～4月5日（日）

対象展覧会：「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音| Polyphonic Voices Bathed in Sunlight コミッション・プロジェクト&東京都コレクション」（無料展）、「APA アワード 2026」、「W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代」

e. こどものためのガイドブック「アート・ま・わる 2026」

配布期間：令和8年3月31日（火）～なくなり次第終了

8 地域との広報連携

恵比寿ガーデンプレイス（YGP）との広報展開

・ホームページ

YGPの運営するウェブサイトへ展覧会および上映情報を随時掲載し、利用者への情報発信を行った。

・SNS

「TOPコレクション トランスフィジカル」「ルイジ・ギッリ 終わらない風景」「恵比寿映像祭2026 あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」のInstagram動画をYGPのアカウントにて配信。

・オフィスワーカー割引

YGP利用者のリピート来館のために、オフィスワーカーへの観覧割引サービスと、当館チケットをお持ちの方へのYGP内店舗でのサービス提供を行った。